# 「学校サポートプログラム活用事例集（Ⅱ）」

## ―小学校におけるソーシャルスキル・中学校におけるピア・サポート・地域全体で取り組むポジティブ教育の実践研究―

教育相談センター　教育相談課
塚田孝子　坪川美穂　甚佐奈央

教育相談センターでは、平成 26 年度から平成 28 年度までの３年間で福井県の教師の学級経営力向上に資することを目的として調査研究と実践研究を行い、小・中学校それぞれの「福井県版学級経営プログラム」である「学校サポートプログラム」を完成させた。また、昨年度は学校支援、教師支援を実効性のあるものにしていくことを目的として、学校の課題に応じて本プログラムを活用した実践研究を行い、活用事例を 10 事例作成した。今年度も申し込みのあった学校で本プログラムを活用した実践研究を行った。その中で、研究協力校を小学校１校、中学校１校、研究協力地域として１つの町を指定して実践研究を行った。昨年度の取組みにおいて、さまざまな学級集団に応じてプログラムを有効に機能させる足がかりは得られたが、いくつかの課題も残った。そこで、今年度は昨年度の実践事例をもとに、本プログラムを活用することで学校の課題が解決していけるというアセスメントができた学校について集中的に訪問するということ、本プログラムを有効に活用するために必要な研修を学校に提供していくということを研究の柱として研究協力校で実践研究を行った。また、研究協力地域では、新たなプログラム作成のために実践研究を行った。

なお、本実践研究にあたり、昨年度研究アドバイザーとして指導助言を得た立命館大学教職大学院の菱田準子教授に、今年度は特別研究員として指導助言を得ながら研究を行った。

**〈キーワード〉　ソーシャルスキル、ピア・サポート、自尊感情、学校保健委員会、持続可能な幸せ、ポジティブ教育**

## Ⅰ　主題設定の理由

教育相談センターでは、ソーシャルスキル教育を柱とした「小学校版学級経営プログラム」と、ピア・サポート活動を柱とした「中学校版学級経営プログラム」の２つを合わせた「学校サポートプログラム」を希望する県内の小・中学校に提供している。現職教育と年間 10 回程度の授業による支援を行う学校を実践校、現職教育を中心に支援を行う学校をサポート校、授業や現職教育を必要に応じて実施し、学校の課題に応じて本プログラムを効果的に活用するための研究を協働で進める学校を研究協力校とし、実践と省察を繰り返しながら、より効果的な学校支援、教師支援を行うことを目的として実践研究を重ねている。

今年度は、実践事例集作成２年目として、前年度までの嶺北のみでの募集を今年度は嶺南も含めた県内すべての小・中学校にして、希望する小・中学校を募集した。申し込みのあった学校から、学校の課題や希望する支援内容についての聞き取りを丁寧に行った上で、実践校とサポート校を決定して実践を行った。昨年度の実践事例では、授業実践と年１回程度の現職教育だけでは広く浅くの支援になってしまい、効果的な学校支援や教師支援にならなかったという課題が挙げられた。そこで今年度は、小・中学校１校ずつを研究協力校として依頼し、より効果的な学校支援、教師支援の在り方について研究するための実践研究を行った。また、２年間の実践研究から、小・中学校それぞれのプログラムに加えて地域全体で取り組むプログラム作成の必要性を感じ、研究協力地域を指定して幼・小・中でポジティブ教

育を柱とした新たなプログラムを作成するための実践研究も行った。研究協力校は２年間、研究協力地域は３年間かけて実践研究を行うこととし、今年度はそれぞれ１年目の実践研究ということで、実践の記録を記述した。また、効果の検証については、先生方へのアンケート調査で行うこととした。

## Ⅱ　各研究の方法と結果及び考察

### 1　小学校におけるソーシャルスキルの実践研究

(1)　昨年度の研究について

昨年度は、実践校４校、サポート校 11 校において、それぞれの学校の課題に応じた実践を行った。これらの実践を通して、授業に入る学級の担任、学校としてソーシャルスキル教育を取り入れたいと考えている管理職の先生方などからの要望に応える形で授業に入るだけでなく、教職員間でソーシャルスキル教育についての理解を深め、さらには学校全体へ広げていくための関わりが必要だと感じた。また、「学校サポートプログラム」の申し込みから実施までの間に年度が変わり、申し込んだ先生と担当する先生が変わってしまったことで、研究がうまく進められないということもあった。教職員の異動や担当者の変更があることを考えると、学校全体や地域全体で同じ思いをもって取り組むことでソーシャルスキル教育を広げていけるのではないかと感じた。そこで、本プログラムをさらに効果的に活用していくために、今年度は本プログラムを活用した授業だけでなく、学校内外にも本サポートプログラムを広げていける取組みにしていきたいと考えた。来年度、養護教諭を中心として、市内すべての小学校でソーシャルスキル教育を取り入れることになっている地域の学校で、本プログラムに申し込みのあった小学校に研究協力校を依頼し、同校のソーシャルスキル教育の取組みをきっかけとして、養護教諭をコーディネーターとしながら、他の学校へも広げていくことを目的として実践を行った。

(2)　今年度の実践研究について

①　研究協力校について

児童数約 250 名。１学年は１～２学級、特別支援学級２学級の小学校である。数年前に不定期にソーシャルスキルトレーニングに取り組んでいた学級もあった。年間を通して朝活動でミニゲームを使ったソーシャルスキルトレーニングを全校で取り入れることとなっており、それと並行して授業でも取り入れたい学級があるということで、実践校の募集に申し込みがあった。

②　研究協力校の課題

人との関わりを苦手としている児童や友達間でのトラブルが多い児童が見られる。落ち着いた学級づくりのために人との関わり方を身につけ、学校教育全体で良好な人間関係を育むためにソーシャルスキル教育を取り入れたいと考えている。また、授業の中でも日常的にペア活動、トリオ活動、グループ活動などを取り入れながら友達と効果的にコミュニケーションをとれるような関係づくりを目指したいとも考えている。

養護教諭としては、ソーシャルスキル教育を取り入れることで、良好な人間関係や学級づくりに効果があると感じている。また、再来年度の養護教諭研究協議会での発表に向けて、来年度には、自己肯定感を高めるための手段の一つとして、同市内の他の小学校でもソーシャルスキル教育を取り入れることになっている。そのため、同校でのソーシャルスキル教育の取組みを他の学校へも広げていきたいと考えている。

(3)　実践の概要

昨年度末に打ち合わせを行い、学校、学級のニーズの聞き取りを行った。人との関わりを苦手としていたりトラブルも多かったりする学年のため、クラス替えがどう影響するか心配であるということ、４月からのスタートをスムーズにしていきたいということで、低学年２学級での授業実践を行うことになった。また、高学年にも、人間関係をうまく築けない児童が多い学級が２クラスあり、ソーシャ

ルスキル教育を取り入れたいという要望があった。実践校での授業には、月１回３時間までという制限があるため、高学年については隔月で１学級ずつ入っていくことになった。毎月、決まった時間に実施する方が児童への意識づけになり、スキルの定着には望ましいため、第３金曜日を授業日として、年間を通した全体計画を立てた。月１回のソーシャルスキルトレーニングは「学校サポートプログラム」に沿った内容で行うこと、各月の授業内容に合わせて朝活動のミニゲームの年間計画を入れ替えることを確認し、現職教育についての日程や内容等についても打ち合わせを行った。

①　授業実践

４月の１回目は、「上手な聴き方」についての授業を低学年２学級、高学年学級で行った。（図１）高学年２学級は隔月で行うことになっていたため、それぞれの学級の実態に応じて担任が必要だと考えたソーシャルスキルトレーニングの授業を取り入れた。高学年 A 学級では、４月「上手な聴き方」、６月「あたたかい言葉がけ（誘う編）」の授業を行い、高学年 B 学級では、５月「あたたかい言葉がけ（誘う編）」、７月「よいところさがし」の授業を実践した。（表１）高学年は、数年前にソーシャルスキルトレーニングの授業を受けていたが、どのような授業をしていたか覚えている児童は、ほとんどいなかった。良好な人間関係をつくるためのきっかけとして授業を行っても、継続し般化していかなければ、身に付いていかないということを実感した。

**図１　「上手な聴き方」の授業**

夏季休業中に４月から７月までの実践について振り返りを行った。低学年２学級は、友達と上手に関われており、普段の生活の中や朝活動の中でもソーシャルスキルトレーニングで学習した内容を意識した活動ができているという振り返りがあった。また、高学年２学級では、隔月での授業実践だけで終わってしまい、学びのサイクルを上手く回すことができていないようだった。そこで、子どもたちの日々の生活に般化できることを目的として、９月からは高学年も月１回の授業実践を行うことにした。

**表１**

| | 低学年２学級 | 高学年A学級 | 高学年B学級 |
|---|---|---|---|
| ４月 | 「上手な聴き方」 | 「上手な聴き方」 | |
| ５月 | 「温かい言葉がけ」 | | 「温かい言葉がけ」 |
| ６月 | 「よいところさがし」 | 「温かい言葉がけ」 | |
| ７月 | 「相手の気持ちを考えた言葉がけ」 | | 「よいところさがし」 |

月１回授業を行うことで、先生方が普段の生活での声かけなどを意識するようになり、子どもたちの向き合い方も少しずつ変化してきた。最初の「ふりかえりカード」を見ると「ミニゲームが楽しかったです」、「スキルを覚えることができました」という感想だったが、夏季休業後は「これからの日常生活で使っていこうと思いました」、「ミニゲームを通して、いろいろな人と関わることができました」というような感想が見られるようになった。毎月の授業は自由に参観できる形にし、管理職の先生方だけでなく実践に入っていない教職員も参観した。指導案を見ただけでは分からない授業の進め方や児童の反応を観察し、授業者としてソーシャルスキルトレーニングを行う場合の見通しがもてたようである。

② 朝活動でのソーシャルスキルトレーニング

学校全体での取組みとして、週１回、１年を通して朝の活動にミニゲームを使ったソーシャルスキルトレーニングを取り入れた。

人との関わり方のコツや人と関わる喜び、人と共に生きるためのルールやマナーを身に付けさせることをねらいとして、実施時間や進め方、配慮事項なども教職員間でしっかり共有し合った上で取り組んだ。学校全体で取り組みやすくするため、年間計画を作成し（図２）、授業実践で行うミニゲームの実施時期とも重なるように活動内容の入れ替えも行った。朝活動と授業実践を関連させることで、より効果的な取組みになった。

なかよしタイム年間指導プログラム

＜ねらい＞
人とのかかわり方のコツ、人とかかわる喜び、人と共に生きるためのルールやマナーを身につけさせる。

＜活動計画＞

| 日にち | 活動名 | ねらい | ルール・進め方 |
|---|---|---|---|
| ①<br>4/19 | あいこジャンケン<br><br>ひたすらジャンケン | 友達ともっと仲良くなる | 先生と５回ジャンケンをする。<br>先生と何回あいこになったか数える。<br><br>相手を見つけて「おはよう」とあいさつをしてからジャンケンをする。何人に勝てるか競争する。（２分間） |
| ②<br>4/26 | あっちむいてホイ | 相手の顔を見ながら楽しく取り組む | ①前の席の友達と、５回ジャンケンをし、あっち向いてホイをする。<br>②前、後ろの席の友達ともする。（３分間） |
| ③<br>5/10 | 百たたきジャンケン | ふれあいを通して、友達ともっと仲良くなる | ルール：①相手が気持ちのいい強さで肩を叩いてあげる。<br>②お礼は、相手の顔を見て言う。<br>①負けた人：勝った人の方を１０回叩いてあげる。<br>②勝った人：「気持ち良かったよ。○○さん、ありがとう。」（３分間） |
| ④<br>5/17<br>5/24 | 目と目のあいさつゲーム | 相手の目を見てあいさつができるようになる | ルール：相手の目を見て言う。<br>①勝った人：相手の目を見て「おはようございます。」<br>②負けた人：相手の目を見て「おはようございます。」<br>②人差し指を相手と合わせて「アウチ」とあいさつし、別れて別の人とあいさつをする。（３分間） |
| ⑤<br>5/31<br>6/7 | ホットな「おはよう」 | 気持ちを伝える言葉を付け加えてあいさつする | ルール：相手の目を見て言う。<br>①勝った人：「○○さん、おはようございます。」（プラス）「自分の気持ちを伝える言葉」<br>気持ちを伝える言葉：①今日も仲良くしようね。<br>②今日も遊ぼうね。<br>③昨日は仲良くしてくれてありがとう。<br>②負けた人：「うん、今日も仲良くしようね。（相手の言ったことを繰り返す）」<br>②２人で握手。（３分間） |
| ⑥<br>6/14<br>6/21 | 「いーれて、一緒に遊ぼう。」 | 仲間に入る言いかができるようになる | ルール：①相手の目を見る。<br>②はっきり聞こえる声で言う。<br>③笑顔で言う。<br>①勝った人：「○○さん、いーれて。」<br>②負けた人：「うん、いいよ！△△さん、一緒に遊ぼう」<br>②２人でハイタッチをする。（３分間） |
| ⑦<br>6/28<br>7/5 | フワフワ言葉ジャンケン<br>「どうしたの？大丈夫？」 | 「どうしたの？大丈夫？」と気持ちを込めて優しく言う | ルール気持ちを込めて優しく言う。<br>①勝った人：「あっ、痛い。（体のどこかを押さえる）」<br>②負けた人：「どうしたの？大丈夫？」<br>②勝った人：「うん、大丈夫。○○さん、心配してくれてありがとう。」<br>②負けた人：「早く良くなるといいね。」<br>②２人でハイタッチをする。（３分間） |
| ⑧<br>7/12<br>7/19 | がんばったことジャンケン | お互いのがんばりを伸ろ | ルール：相手の目を見て言う。相手の顔を笑顔で聞く。<br>①勝った人：「１学期に頑張ったことを教えてください。」<br>②負けた人：自分が１期に頑張ったことを言う。<br>②勝った人：話を聞いたら「頑張ったね」と拍手をして相手をほめる。<br>②２人で握手をする。<br>頑張ったことが思い浮かばない人は、何回でも同じことを言ってもいい。（３分間） |

**図２　ミニゲームの年間計画**

③ 現職教育

ア 第１回「Q-U の結果の活用法について」（６／21）

５月に実施した Q-U の分析結果を持ち寄り、Q-U の見方とその活用法についての現職教育を行った。

平成 29 年度の SASA 質問紙の結果を検証した結果、安心感のある学級ほど学力が高いということが示された。また、SASA の結果と Q-U のデータをクロス集計した結果、学力が高い子ほど学校生活満足群にプロットしているということが分かっている。つまり、安心して生活できる学級にするためには、ルールづくりのソーシャルスキルトレーニングが有効ということである。そこで、Q-U の結果をもとに、今の学級がどういう状態であるかを把握し、現在取り組んでいるソーシャルスキルトレーニングをどのように取り入れていくとよいかということについて提案した。

イ 第２回「ソーシャルスキルトレーニングについて」（８／21）

小学校では担任の空き時間が少なく、所員が実践しているソーシャルスキルトレーニングの授業を参観することが難しい。そこで、ソーシャルスキルトレーニングの授業の効果的な進め方についての現職教育を夏季休業中に行った。この現職教育では、ソーシャルスキルトレーニングの基本について伝え、先生方が授業を受ける形で「上手な聴き方」の授業を行った。その中で、進めていく際に気を付けるとよいことなどを伝えた。T１やT２としてではなく、実際に児童の立場で授業に参加したことで、どうすると楽しく参加できるか、どのように進めると分かりやすいかということが、より理解できたようだった。また、この現職教育には、研究協力校の養護教諭が参加を呼びかけ、市内の他の学校の養護教諭も参加した。

ウ 第３回「ペアトークを生かした授業」（11／16）

研究協力校の先生方と実践と省察を繰り返す中で、「学校全体で進めているペアトークが上手くいかない」ということが課題として挙げられた。そこで、ペア活動やグループ活動の進め方についての提案として、「学校サポートプログラム」の「気持ちを周りの人に伝えよう」の授業の中にペアトークやトリオトークを取り入れ、研究協力校の課題を解決するための問題提起となるような流れに作り直した。さらに、所員が高学年 A 学級で授業を行い、その授業を共同参観授業として、校内全ての先生方が参観し（図３）、それを受けて放課後に３回目の現職教育「ペアトークを活かした授業」を行い、課題について教員全体で考える機会とした。（図４）

**図３　共同参観授業**

授業は、様々な場面で感じる自分の素直な気持ちを相手に言葉で伝えるという力を身に付けることをねらいとして行った。ミニゲーム「つながりビンゴ」では、相手の質問に対して「はい、そうです。」「いいえ、違います。」という二択で自分の気持ちを伝えるというペア活動を、展開においては、正解がなく、自分の生活を振り返って考えることができる話しやすい内容をペアで話し合う時間を設定した。また、「きもちすごろく」ではトリオですごろくゲームを行い、少し人数が増えた状態で自分の気持ちを伝える練習をした。授業後の「ふりかえりカード」からは、「自分の意見をはっきりと言えたのですっきりしました。いい気持ちといやな気持ちを相手の立場になって考えたいと思いました」というような感想が見られ、自分の気持ちを伝えることの大切さに気づいた児童が多かった。（図５）さらに、この授業だけでスキルを身に付けるのは難しいため、スキル般化のための方法として、一日に一回どういう場面でどういう気持ちになったかを振り返るチャレンジ期間を１週間設けた。この１週間の取組みを通して、自分がどのような場面でどのような気持ちになったのか、ということを改めて考えることができ、自分を見つめなおすきっかけになったようだ。

この授業では、児童は活動に一生懸命取り組んでいたが、所員の指示が的確でなかったり、ユニバーサルデザインの配慮が足りなかったりして、効果的なペアトーク、トリオトークにつなげることができなかった。そのため、放課後の現職教育では、所員の授業を反省材料として振り返りを行い、ペアトークを活かすための工夫について話し合った。その後、ペアトークをどのような形で取り入れていくとより効果的な活動になるかということを提案した。

**図４　第３回の現職教育**

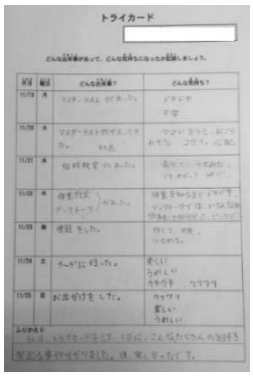



**図５　児童のワークシート**

④　養護教諭を通した広がり

来年度は、市内すべての学校でソーシャルスキル教育を取り入れていくことになった。今年度はそれぞれの学校が取り入れ方を模索している段階であるため、研究所が関わっている研修や研究協力校での授業などに参加する機会を積極的に作り、研究協力校の養護教諭が市内の養護教諭へ参加を呼びかけた。

ア　「学校サポートプログラム自主研修会」（８／３）

菱田教授によるピア・サポートの１日研修が研究所で行われた。夏季休業中ということもあり午後から他の研修が入っていたため、参加人数、参加時間は少なかったが、ピア・サポートについての理解を深めた。「休み時間のお助け隊の活動など取り組みやすそうでやってみたいと思いました」、「学校でも指導できるようなプログラムがあり、チャレンジしてみたいと思いました」といった感想が見られ、ソーシャルスキル教育だけでなく、ピア・サポート活動を取り入れることを考えるきっかけにもなったようである。また、参加できなかった午後の分については記録ビデオを見て学んでいた。

イ　研究協力校の現職教育「ソーシャルスキルトレーニングについて」（８／21）

ソーシャルスキルトレーニングについて理解を深め、来年度、どのような形で取り入れていくことができるかの参考にするため、市内の養護教諭も参加した。「児童の立場になって授業を受けたことで、より理解しやすかった」といった感想が見られ、ソーシャルスキル教育を自分の学校では、どの

ように取り入れていくことができるか、どのように進めていくとよいかということを考えるきっかけとなった。

ウ　研究協力校（中学校）の学校保健委員会「自分を見直そう集会」の参観（９／27）

中学校の研究協力校の養護教諭を紹介したところ、市内の養護教諭が研究協力校（中学校）の学校保健委員会を参観した。ソーシャルスキルトレーニングに取り組んだことのある学校は、ピア・サポートトレーニングのような活動も取り入れていきたいと考えたようだった。また、全校で取り組むことができる学校保健委員会で取り入れることを考える機会にもなった。

エ　研究協力校での「上手な断り方」の授業参観（１／25）

授業がどのように展開されるのか、授業を受けている児童の反応はどういう雰囲気になるのか、ということを実際に見てもらうために、研究協力校での授業実践を公開した。授業を参観し、授業の取り入れ方や進め方を考えたり、計画を立てたりするきっかけとなった。

⑤　学校保健委員会

来年度の実施に向けての事前準備として、ソーシャルスキル教育を子どもたちに体験させたいという思いがあり、市内３つの小学校で学校保健員会を使ってソーシャルスキルトレーニングについて学習した。

ア　Ｃ小学校　「体験！ソーシャルスキル　～かかわり合う力～」（10／３）

大規模の小学校だったため、低学年と高学年に分かれて行った。今までソーシャルスキルトレーニングを取り入れていなかったため、ソーシャルスキルとはどういうものか、ということから学習した。その後、プログラムの最初の授業「上手な聴き方」の流れに沿った形でインストラクションやモデリングを行い、最後は、「聴き方名人」についてのポイントを伝え、リハーサルで「質問じゃんけん」をしながら上手な聴き方を体験した。児童の感想から、話の聴き方のポイントが分かり、今後に生かそうとする思いが感じられた。また、全校での取組みだったため、ソーシャルスキルトレーニングの基本やどのような流れで進めていくのか、ということについての共通理解ができ、今後の取り入れ方について具体的に考える一助となったようだ。児童や先生方の感想として、次のようなものがあった。

〈児童の感想〉
・あいてのはなしをさいごまで、みみとめとこころできくことをまもります。（１年女子）
・じゃんけんをした相手の子は、とても上手な聴き方をしていて、すごいと思いました。今日この授業であいづちなどをすれば、話す人は傷つかないと分かったので、これから生かしたいです。（６年男子）

〈先生方の感想〉
・担任が聴くことの大切さを伝える何回分も、全校でやると意識が高まる気がしました。
・保護者への啓発のためにも、学校公開の日やふれあい学級などで取り組んでみるのもよいのではないか。

イ　Ｄ小学校　「ぼく・わたし・あなたのいいところ発見！」（11／16）

小規模の小学校。数年前にソーシャルスキルトレーニングに積極的に取り組んでいたため、学年によって差はあるものの、ソーシャルスキルトレーニングを学習したことのある児童が多い。自分に自信をもてない児童が多いことが気になるということで、市内の養護教諭部会で作成した「こころのアンケート」の結果をもとに、「自分のいいところ」について振り返り、その後、いいところを見つける方法の１つとしてリフレーミングについて学習した。（図６）さらに、縦割り班の友達のいいところさがしをして伝

**図６　いいところさがし**

えるという活動、声を出さずに誕生日順に並ぶという「バースデーチェーン」を行った。振り返りの発表や児童の感想から、自分のいいところを友達や他の学年から言ってもらったことで、改めて自分のよさに気付くきっかけになったようだ。児童の感想として、次のようなものがあった。

〈児童の感想〉
・みんなで１つの輪を作ったことで、心が一つになったような気がした。
・自分のいいところを言ってもらって、自分にはこんないいところがあるのだと分かった。

ウ　Ｅ小学校　「ソーシャルスキルトレーニング　～温かい言葉がけ～」(11／28)

小規模の小学校。学級や学年単位でのソーシャルスキルトレーニングの授業は行っていないが、２年前の学校保健員会で「上手な聴き方」について学習したことがあり、３年生以上はソーシャルスキルトレーニングについて少し知識がある。学校の課題として、児童の言葉遣いが挙げられたので、ソーシャルスキルの中の「温かい言葉がけ」について学習した。まず、ソーシャルスキルについての説明と「上手な聴き方」のポイントを伝えた後、「温かい言葉がけ」のソーシャルスキルトレーニングを行った。縦割り班での活動として行ったため、同じ学年の友達だけでなく、上級生や下級生いろいろな友達ともソーシャルスキルトレーニングをすることができた。温かい言葉をかけられること、温かい言葉をかけること、どちらも気持ちがうれしくなるという感想が多く見られ、言葉遣いについて考えるきっかけを作ることができたようだ。児童の感想として、次のようなものがあった。

〈児童の感想〉
・温かい言葉を相手にかけると、相手も心が温かくなるし、かけた人自らも心が温かくなるのでいいなと思った。
・温かい言葉を言ってあげると、友達が喜んでくれるのは知っていたけれど、嫌な言葉をかけたときよりこんなに気持ちが変わるなんて驚いた。

(4)　結果

〈研究協力校の先生方に行ったアンケート調査〉

①　本プログラムに取り組んでみてどうだったか。

・どんな内容でも進んでやってみようという気持ちで、苦手とか嫌とかいう気持ちは口に出さずに協力的にやっていた。
・全員と仲良くなるためのスキルとして、日ごろの授業ではなかなか実践できないことに取り組むことができ、自分自身の勉強になった。子どもたちにもソーシャルスキルトレーニングの意味が伝わり、楽しく活動できていたと思う。

②　本プログラムを取り入れることで児童の人間関係づくりに役立ったか。

・自分自身のことを考えるきっかけになったのではないかと思う。
・人間関係づくりに必要な心がまえなど、見えない部分の意識はできたのではないかと思う。
・中に入りづらい子に誰が行ってくれるのかを見ることができたし、困っている子に手を差しのべる場面が作れた。

③　ソーシャルソーシャルスキルトレーニングを取り入れて良かった点。

・自分自身もソーシャルスキルトレーニングのポイントや大切さを改めて考えることができた。
・自分の意見を素直に言えるようになった。また、友達の言うことを聞こうとする姿勢が見られるようになった。
・交流する場面が多く作れた。

④　ソーシャルスキルトレーニングを取り入れて良くなかった点。（困難に感じた点・改善点）

・自由度が高い分、ふざけて本題からずれてしまうような子もいた。楽しい雰囲気で行いたいこともあり、どこまで注意すべきか難しかった。
・１，２人でも一緒に出来ない子がいると全体の雰囲気に影響してしまうのが難しい。

〈市内の養護教諭の先生方に行った聞き取り調査〉

①　今年度、いろいろな研修に参加したり、学校保健委員会で取り入れたりしたことは、来年度の計画を立てる上での参考になったか。　→　参考になった。　全員

②　来年度、どのように取り入れていくのか。

・クラス単位で取り入れたいという思いはあるが、続けていくことを考えると無理のない範囲で取り入れていくことが大事だと思う。朝活動に新たに組み込むのは難しいので、学校行事の中、委員会発表の中、朝会後の生徒指導の話の中などにからめて取り入れて行く予定。
・年間を通して継続して取り組むことが目的なので、帰りの会や空き時間などクラスの状況に応じて毎週１回、ミニゲームのような形で取り入れていく。また、保健指導の中で、長い時間を使って取り入れていきたい。
・朝の時間、週１回帯取りで全校一斉に取り組む予定。

③　ソーシャルスキル教育を取り入れていくことに関して課題に思うことや不安に感じることはあるか。

・ふざける子が出た場合、目的に合わせてどう活動させるとよいか。また、その場ではできても、学校生活に応用させるためにどう働きかけるとよいか。
・担任の先生方に呼びかけて、今の段階から取り組んでもらっているが、各学年バラバラで年度途中からは難しいと思った。主になる人をきちんと決めて、チームで取り組むことが必要だと感じている。

(5)　考察

今年度の成果と課題として、以下のことが挙げられる。

①　研究協力校での取組みの成果と課題

昨年度までは、授業に入る学級の担任や学年主任、研究主任などが学校と教育相談センターとのコーディネーターの役割を果たし、授業日の計画や現職教育の日程、内容等を調整してきた。学級経営や校務分掌などを抱えて多忙であるため、学級や学年でのソーシャルスキルトレーニングの取組みを実践した学級から学校全体に広げていくことが難しかった。さらに、学校外に広げていくということは、かなり難しいことだと感じていた。今年度は、養護教諭がコーディネーターとして学校と教育相談センターの間に入ったことで、授業日などの日程調整はもちろんのこと、学校全体の児童の状況を考えた取組み、客観的な視点からのソーシャルスキル教育の必要性、学校全体のことを考えた現職教育などを考えることができた。また、授業実践だけでなく、朝活動と授業実践の活動を連動させたり、共同参観授業を通して校内の先生方と一緒に考えていく機会をつくったりできたことが成果として挙げられる。

課題としては、般化が十分でなかったことが挙げられる。アンケート調査からは、きっかけづくりや意識づけなど、子どもたちの人間関係づくりに効果があったという回答を得たが、十分な関係を築き、継続するまでには至らなかった。授業での気付きをさらに普段の生活で継続して実践していくためにも、普段の授業や活動での般化はもちろんだが、授業実践からさらに般化につながるような取組みを研究所から提案し、積極的に教育活動に組み込んでいく必要がある。

② 養護教諭を通した取組みの成果と課題

研究協力校のある市内全ての小学校において、来年度はソーシャルスキル教育を取り入れていくことになっており、研究協力校の養護教諭を中心として、市内の他の学校へも広がりが見られた。養護教諭部会をコミュニティーとして、研究協力校での活動や市内外の他の学校が行う学校保健委員会での活動を見合ったり、取り入れたりするなどして、自分の学校では、どのように取り入れていったらいいか、また、どのような形でなら取り入れていくことが可能か、というようなことを考える機会になった。養護教諭同士がお互いに情報を共有し合い、学び合うことでソーシャルスキル教育についての理解、それを実践していくことの効果、継続して取組んでいくにはどうすると良いか、といった方向性も見つけることができたようだ。

課題としては、今年度は研究協力校の養護教諭を間に入れてのやりとりとなり、他の学校の養護教諭と間接的に関わることが多かった。そのため、アンケートにあるような疑問や課題が生じた場合に、すぐに対応することが難しかった。所員が養護教諭部会に参加するなど、一緒に課題について考えたり、その場で適切な提案をしたりといった直接の関わりをすることが課題と感じたことに対して早急に対応するためにも必要ではないかと感じた。

来年度は、研究協力校の課題解決のために、学校側からの要望を聞いて実践するだけでなく、こちらから、こういう取組みができるということを積極的に提案していく必要があると考えている。そのためにも、学校全体を客観的に見ることができる立場にある養護教諭と協働して、密に連携を取りながら、さらに実践を積み重ねていきたい。

## ２ 中学校におけるピア・サポートの実践研究

(1) 昨年度の研究について

昨年度は、実践校およびサポート校において、それぞれの学校または学級の実態に応じてプログラムを有効に活用していくにはどうしたらよいかということを教員と所員で検討しながら実践を行っていった。いくつかの学校では、実践の中心となった教員が、新しい学びへの高い意欲と実践力、コーディネート力をもって校内のほかの教員に実践を広げていくことによって、学校支援、教師支援が実効性のあるものとなり、実践研究が大きく進んだ。また、年度途中に学級の困難さからプログラムを導入したいとの希望があり、支援を行った学校が数校あった。これらの学校での実践からは、対症療法的な指導よりも未然防止のための指導を目的として本プログラムの活用を学校に勧めていくことが効果的であるという示唆が得られた。今年度は、コーディネーターを中心に学校全体でピア・サポートに取り組んでいくことによって学校の課題を解決していくことを目指している中学校１校に研究協力校を依頼し、プログラムを学校の課題解決にさらに有効なものとしていけるよう実践を積み上げていくこととなった。

(2) 今年度の実践研究について

① 研究協力校について

生徒数約 170 名、１学年２学級、特別支援学級２学級の中学校である。生徒は１つの小学校から進学してくる。昨年度、全教職員が地区の自主研究会に参加した際に、小学校におけるピア・サポートの活動を参観し、菱田教授による講演を聞いた。その後、教育相談センターに「本校でもピア・サポートに取り組みたいので訪問研修をお願いしたい」との依頼があり、３学期に２年生２学級でのピア・サポートトレーニングと全教職員への現職教育を集中的に行った。すべてのピア・サポートトレーニングの授業を参観した養護教諭が、次年度もピア・サポートを継続して実施していきたいという思いをもったことと、研究協力校が来年度の地区の自主研究会担当校となっており、管理職としては、ピア・サポートを取り入れた実践を発表の中心にしたいということで、実践校の募集に申し込みがあった。４月に３年生で実施された全国学力調査における生徒質問紙回答では、「自分には、よいところがあると思う」と「人の役に立つ人間になりたいと思う」について「当てはまる」と答えた生徒の割合が昨年度の３年生よりも 10%以上高くなっており、この結果からもプログラムの実効性を感じている。

② 研究協力校の課題

今年度初めに学校のニーズの聞き取りを行った。学校は、人との関わりに苦手意識のある生徒や自尊感情が低い生徒が見られ、そのような生徒にとっても安心・安全な学校環境をつくることについて課題を感じている。そこで、来年度教科化される道徳をはじめ、学校行事や学級活動等においてプログラムを有効に活用することによってピア・サポートを生かした仲間づくりを仕組み、いじめなどの問題行動や不登校を未然に防ぎ、学校にゆとり、笑顔、楽しさを増やしたいと思っている。来年度の地区の自主研究会において、それまでに積み重ねたピア・サポートの実践について発表することを計画している。研究協力校の教育目標と研究主題は以下のとおりである。

・教育目標：自ら学び、心豊かにたくましく生きる生徒の育成
　　－学ぶ意欲・豊かな心・たくましさ－

・研究主題：自分の思いや考えを伝え合い、認め合うことのできる生徒の育成
　　～ピア・サポートを生かした仲間づくりを通して～

(3) 実践の概要

今年度より２年間研究協力校を依頼し、様々な学校活動へのピア・サポートの取り入れ方を提案しながら協働して実践研究を行っていく予定である。今年度は、１年目の実践について記述する。

① 現職教育

以下のように３回の現職教育を実施した。さらに、８月３日に研究所で実施した菱田教授による「学校サポートプログラム自主研修会」にも５名の先生方が参加し、ピア・サポートについての理解を深めた。

ア 第１回「突破力育成！学校サポートプログラム－ピア・サポートプログラムについて－」（４／13）

新年度が始まってすぐの時期に、各学年で取り組むピア・サポート活動の計画をたてることを目的として現職教育を行った。まずピア・サポートと学校サポートプログラムについて説明を行い、プログラムを実施していく上で全教職員が知っておくべき基本的な内容の理解を図った上で、いくつかの県内中学校での学校サポートプログラム実践例を紹介した。その後、各学年会で集まり、目指す生徒像および目指す生徒像に近づくために取り入れていくとよいと思われるピア・サポート活動について話し合い（図７）、話し合った内容を全教職員で共有した。その後、６月の合唱コンクール時に養護教諭がワークシートを作り、コンクール終了後に各学級でありがとうカードを交換し合うことを各学年に依頼した。担任の先生方から、「ありがとうカードの交換によって学級にあたたかい雰囲気が生まれた」との声が聞かれ、今後も学校行事後に実施していくこととなった。

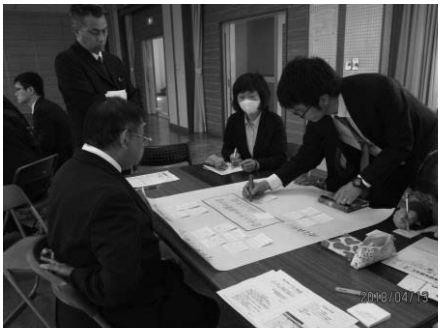


**図７　学年会での話し合い**

イ 第２回「ピア・サポートで魅力ある学校づくり－道徳との関連－」（６／20）

前期指導主事訪問の後、道徳の目標や内容とピア・サポートとの関連についての現職教育を行った。11 月の後期指導主事訪問時にピア・サポートを取り入れた道徳の授業を各学年で実施するにあたり、ピア・サポートと道徳の関連について研修を行うこととなった。研修の中では、まず道徳の目標や内容とピア・サポートとの関連について説明した。そして、県内中学校におけるピア・サポートを取り入れた道徳の実践例も紹介し、様々な道徳的価値について考える授業にピア・サポートを取り入れて実施できることを伝えた。

また、考え、議論する道徳の実施に向けて、「困りごとリストを作ろう」という演習を行った。４人グループになって、１人が自分の困りごとを話し、他の３人がそれぞれ内容のフィードバック、感情のフィードバック、やれていることのフィードバックをすることによって、先生方に共感的に話を聴く体験をしてもらった。（図８）先生方は、考え、議論する道徳の実施には、お互いの意見を認め合うことのできる安心・安全な学級づくりが大切であることを改めて感じていたようであった。

**図８　「困りごとリストを作ろう」**

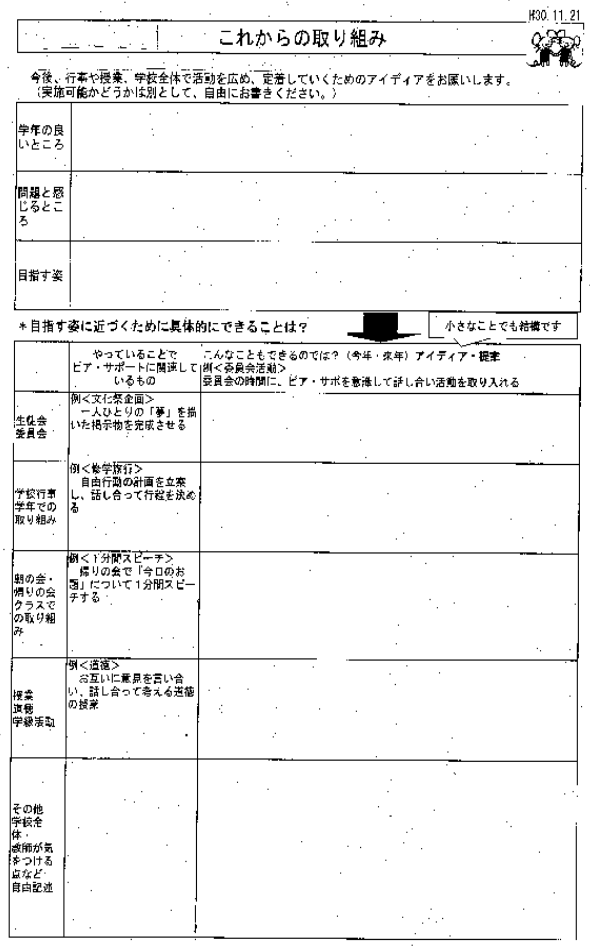
ウ　第３回「研究推進について」（11／21）

後期指導主事訪問の後、これまで取り組んできた実践研究について振り返る現職教育を行った。１回目の現職教育の内容と重なるが、再度ピア・サポートの概念と効果について話をした。そして、今年度実践してきたことを例として挙げながら､学校サポートプログラムについても再度説明を行った。プログラムを実施するにあたり多くの先生方が戸惑うのは、ピア・サポート活動をどのようにプランニングして実践し、振り返ったことをどのように次の活動につなげていくかという PDCA のまわし方である。この点について、社会的自尊感情の向上を目標として２年生で取り組んだピア・サポート活動を例として挙げ、当日の共同参観授業であった道徳の授業におけるピア・サポートについても触れながら、順を追って説明していった。まとめとして、それぞれのピア・サポート活動において何をねらうのか目標を明確にし、その目標を教職員が共通認識することが大切であることを伝えた。

②　カリキュラム・マネジメント

研究推進委員会（校長、教頭、研究主任、学年主任、養護教諭、所員）において、来年度に向けてピア・サポート活動年間計画の作成に取り組んだ。まず、学校行事と関連させたピア・サポートを年間計画に組み込んだものを、研究主任が年間計画案として委員会に提案した。そして今後、学年会や教科会から提案されたピア・サポートを年間計画に入れていくこととなった。今より教職員の負担がさらに大きくなるのではないかという意見に対しては、新しい活動を追加するのではなく、今ある学校行事や授業などを生かしてピア・サポートを取り入れていくという視点で年間計画を作成していくことを、職員会議や現職教育などの機会をとらえて、研究主任や所員などから繰り返し教職員に説明し、共通理解を図っていった。

また、今後さらにピア・サポート活動を広め定着していくために、研究所からの提案で各学年から特別活動担当者を１名選出してもらった。３回目の現職教育後に担当者に集まってもらい、各学年で現在やっていることでピア・サポートに関連しているものや、こんなこともできるのではないかというアイディアを、担当者を中心として書き出すよう依頼した。（図９）



H30. 11. 21

これからの取り組み

今後、行事や授業、学校全体で活動を広め、定着していくためのアイディアをお願いします。
（実施可能かどうかは別として、自由にお書きください。）

| | |
|---|---|
| 学年の良いところ | |
| 問題と感じるところ | |
| 目指す姿 | |

＊目指す姿に近づくために具体的にできることは？　小さなことでも結構です

| | やっていることでピア・サポートに関連しているもの | こんなこともできるのでは？（今年・来年）アイディア・提案 |
|---|---|---|
| | | 例＜委員会活動＞委員会の時間に、ピア・サポを意識して話し合い活動を取り入れる |
| 生徒会委員会 | 例＜文化祭企画＞一人ひとりの「夢」を描いた掲示物を完成させる | |
| 学級行事学年での取り組み | 例＜修学旅行＞自由行動の計画を立案し、話し合って行程を決める | |
| 朝の会・帰りの会クラスでの取り組み | 例＜1分間スピーチ＞帰りの会で「今日のお話」について1分間スピーチする | |
| 授業道徳学級活動 | 例＜道徳＞お互いに意見を言い合い、話し合って考える道徳の授業 | |
| その他学級全体・廊下が気をつける点など自由記述 | | |

**図９　これからの取組みに向けて**

③　ピア・サポートトレーニング

ピア・サポート活動に取り組む際に必要なスキルを学ぶ機会として、２年生２学級において、以下のように学校サポートプログラムに沿って計５回のピア・サポートトレーニングの授業を担任と所員のティームティーチング（T・T）によって実施した。また、来年度からはこれらのトレーニングを１年生で実施する予定であるため、当初の予定にはなかったが、今年度の１年生２学級においても 11 月から１月にかけて５回のトレーニングを実施することとなった。１年学年会から、うわさや LINE などによる人間関係のトラブルを予防したいとの要望があったため、２年生とは少し違う授業内容を提案し以下のように授業実践を行った。（表２）

**表２**

| | 第２学年（５月～10 月） | 第１学年（11 月～１月） |
|---|---|---|
| １回目 | 「みんなってすごい！自分もすごい！」 | 「みんなってすごい！自分もすごい！」 |
| ２回目 | 「心地よい聴き方について考えよう」 | 「心地よい聴き方について考えよう」<br>＋「気持ちを読みとろう」 |
| ３回目 | 「気持ちを読みとろう」 | 「気持ちのよい話し方をしよう」 |
| ４回目 | 「気持ちのよい話し方をしよう」 | 「うわさ話への対処法」 |
| ５回目 | 「うわさ話への対処法」 | 「悪いのだ～れ」 |

④　学校行事と関連させたピア・サポート活動

ア　文化祭・体育祭に向けて

文化祭と体育祭について別々に、全生徒が自分にできるピア・サポートをワークシート「My サポートプラン」（図 10）を使って各自でプランニングし実践を行った。実践後にはグループで各自の実践を共有し振り返りを行った。振り返りでは、次はどうするともっとよくなるかということについて、「指示がちゃんと分かったら、大きい声で返事をする」、「困っている人や分からない人に積極的に声をかける」、「お互いに認め合い支え合うことで団結力のある色になる」などといったことが出されていた。また、ありがとうカードの作成も級友と３年生に対して行った。１・２年生が３年生へありがとうカードを渡したところ、３年生から「自分たちからも１・２年生に渡したい」との声が上がり、３年生から１・２年生へ自主的にありがとうカードが渡された。

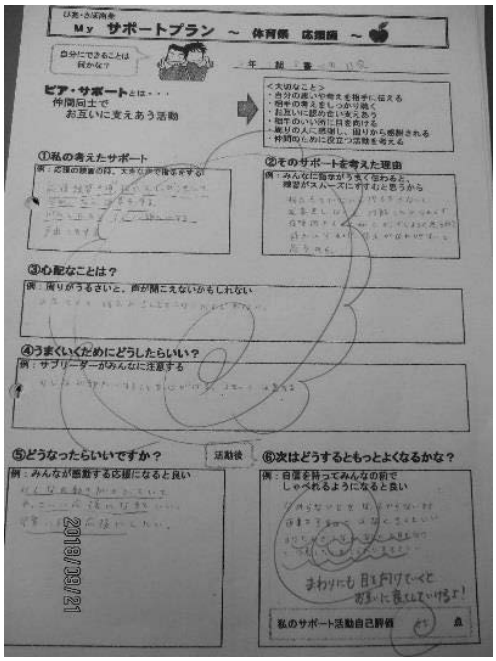



**図 10　My サポートプラン**

イ　特別支援学校との交流に向けて

２年生が、地域にある特別支援学校との交流行事においてピア・サポート活動を実施した。特別支援学校の生徒に対してどのようなサポートができるか、心配なことは何か、うまくいくためにどうしたらよいか、どうなったら自分として満足か、などといったことをプランニングにおいて考えた上で交流行事にのぞんだ。当日は、班ごとに考えたゲームを特別支援学校の生徒と楽しみ、交流を深めた。行事後には、学校間で「ありがとうカード」を交換し

合った。特別支援学校の生徒と先生から届いた「ありがとうカード」には、「ゲームのとき、目の前でカードを見せてくれてうれしかったです」、「車椅子を押して、学校を一緒に見てくれてありがとうございました。楽しかったです」、「よく考えてパズルを作ってあり、また、当日の本校の生徒の様子を見て柔軟にルールを変えてくださり、何度も楽しめるように動いてくださったこと、本当に感謝です」、「車椅子の生徒と一緒に玉入れをするとき、『どうすればいいですか？』と聞いてくれた子がいました。『どう関わるとよいか』『どんなゲームが楽しいか』など、みんながいろいろ考えてくれたことがうれしかったです」といったことが書かれており、温かい交流が行われた様子が伺えた。（図 11）

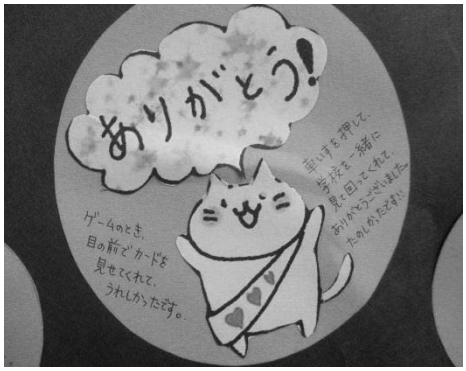



**図 11　特別支援学校から届いたありがとうカード**

⑤　保健指導

ア　学級指導「私のストレス相談会」「歯と口の相談会」

ピア・サポートを取り入れた保健指導を養護教諭が考え、ワークシートやパワーポイント資料、指導案等を準備した上で各学級の担任が実施した。７月の「私のストレス相談会」では、ストレスについて理解し自分のストレス状態を知った後で、グループ内で自分にどのようなストレスがあるかを発表し合った。そして、その中の１つのストレスについて対処法を提案し合った。11 月の「歯と口の相談会」では、むし歯や歯肉炎について理解し、自分のむし歯や歯肉の状態を知った後で、グループ内で自分にどのような歯や歯肉の問題点があるかを発表し合った。そして、問題点について解決法を提案し合った。

イ　学校保健委員会「自分を見なおそう集会」（９／27）

養護教諭より、９月の学校保健委員会での講師依頼があった。年度当初に「心の健康アンケート（自尊感情測定尺度　東京都版）」を実施したところ、「私は今の自分に満足している」、「私は自分のことが好きである」、「自分はダメな人間だと思うことがある」の項目の数値が他の項目に比べ低かったという課題を受けて、学校保健委員会の内容を、強みとリフレーミングについて演習を入れながら学ぶものとした。リフレーミングの活動を楽しく行えるよう、活動名を体育祭の応援のかけ声を用いて「性格チェンジ！あげあげホイホイ！」とした。（図 12）保健委員がアンケート結果の発表や司会、演習のモデリングを務め、演習では縦割り班になって、３年生をリーダーとして楽しく温かい雰囲気で活動する様子が見られた。実施後の生徒の感想から、同じ班の生徒が自分の話をしっかり聞いてくれたこと、自分のために一生懸命リフレーミングを考えてくれたということを、とてもうれしく心地よく感じたことが分かる。また、「心の健康アンケート」において数値の低かった項目において向上が見られた。（表３）

**図 12　リフレーミング活動**

〈生徒の感想〉
・自分の意見を言うのは最初はとても緊張したけど、どんどんやっていくと緊張がほぐれてきました。リフレーミングで、たくさんの人が自分の短所に意見を言ってくれてうれしかったし、改善もしていきたいと思いました。
・同じ班の人が、自分の短所を長所にしようと一生懸命考えてくれてうれしかったです。私は今の自分があまり好きではなく、人と比べてしまうので、これからは、人と比べずにリフレーミングを使っていきたいです。友だちが困っていたら、リフレーミングを使って相談にのってあげたいです。
・班の人に短所を長所に変えてもらって、自分が嫌だなと思っていたことが少し楽になった気がしています。これから、家でも外でもリフレーミングを使ってみたいと思いました。この授業を受けることができてよかったです。
・かけ声がおもしろくて、楽しみながら性格チェンジをできたと思います。
・自分が意見を言ったときに、メンバーの人が「なるほど」と言ってくれたり、あいづちをうってくれたりしたことが、とてもうれしく感じました。

**表３　「心の健康アンケート」結果**

・今の自分に満足していますか？

| | 満足 | まあまあ満足 | 満足でない |
|---|---|---|---|
| 実施前 | ６％ | 72% | 22% |
| 実施後 | 15% | 75% | 10% |

・自分のことが好きですか？

| | 好き | まあまあ好き | 好きでない |
|---|---|---|---|
| 実施前 | ３％ | 70% | 27% |
| 実施後 | 10% | 77% | 13% |

⑥　後期指導主事訪問における共同参観授業（11／21）

来年度の自主研究会で道徳の授業を公開することを見据え、11 月の後期指導主事訪問時にすべての学年でピア・サポートを取り入れた道徳の授業を行うこととなった。月に１回ピア・サポートトレーニングを行っている２年生の授業を共同参観授業とすることが決まり、夏季休業中から学年会を中心とした授業研究に所員も加わって検討を重ねた。

２年生では「左手でつかんだ音楽」という教材で内容項目１－（２）「強い意志」について考える授業を行うこととなった。学年会で実施した事前授業では、展開後段で「将来の夢・目標を実現するために、中学校ではどのようなことを行っていくといいだろうか」ということについて、仲間の将来の夢や目標にたちはだかるであろう困難を乗り越える方法を班でアドバイスし合うという活動を行った。しかし生徒たちの様子を見ていると、抽象的なアドバイスにとどまってしまい、話し合いが深まらないまま終わってしまった感があった。事前授業の参観を依頼してあった菱田教授からは、「アドバイスすることだけがピア・サポートではない。友だちの夢をしっかり聴いてあげるだけでも立派なピア・サポートである。しっかり聴いてもらうことで、夢を実現させようというエネルギーがたまる」との助言を受けた。そこで再度学年会とともに活動内容を検討しなおし、指導主事訪問当日は仲間の将来の夢や目標について班でインタビューし合うという活動に変えて授業を行った。(図 13) 生徒が授業の最後に書いた感想には、次のようなものがあった。

**図 13　インタビュー活動**

〈生徒の感想〉
・夢のために努力できるのはいいことだ。あきらめずに努力する人が夢をかなえることができる。
・多くの人に夢をもってもらいたいと思う。
・友達の夢を聞いて応援したいと思った。
・友達もがんばっているので自分もがんばりたい。

⑦　自尊感情の向上を目的とした取組み「ドリカム・チャレンジ」

研究協力校の課題として自尊感情の低さが挙げられていたので、９月に、自尊感情の２つの領域（基本的自尊感情と社会的自尊感情）について測定するため、２年生において自尊感情測定尺度「そばセット（SOBA-SET)」を実施した。その結果、約４分の３の生徒は最も理想的な SB タイプであったが、残りの生徒は、sB タイプまたは sb タイプであった。つまり、社会的自尊感情が十分に育っていない生徒が約４分の１いることが分かった。社会的自尊感情は、他者との比較による相対的な優劣による感情であり、他の人に勝ったと思うと大きくふくらみ、負けたと思うと小さくなるものである。社会的自尊感情の低さは社会的スキル不足や周囲への配慮不足に起因しており、高めるためには人との関わりに挑戦できる環境を作ったり達成感を味わわせたりする必要がある。そこで、後期指導主事訪問で行った道徳の授業をうけて、２年生において「ドリカム・チャレンジ」という活動を所員から提案し実施してもらった。この活動は、自分の夢の実現に向けて今達成したい小さな目標を立て、それを班のメンバーに宣言し、お互いに応援し合いながら一定期間その目標に挑戦するというものである。（図 14)「ドリカム・チャレンジ」実施後に生徒が書いた感想には、次のようなものがあった。

〈生徒の感想〉
・班のみんなに応援され、とてもうれしい。
・みんなが自分のがんばっていたところを見てくれていて、うれしかった。
・自分のしたことを「すごい」と言ってくれて、すごくうれしかった。
・計画を立てて行動したら、「次に何をしないといけないのか」がよく分かって、実践したいことができた。
・もっと自分が出来ることを増やしていきたい。

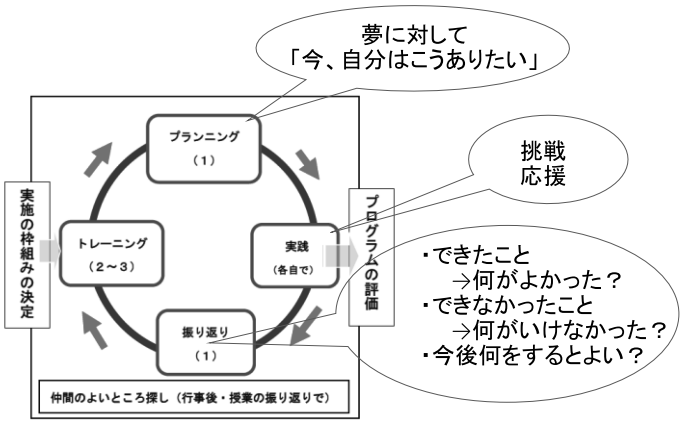



**図 14　「ドリカム・チャレンジ」の PDCA**

(4)　結果

研究主任と１・２年学年会の先生と養護教諭にアンケート調査を行った。数字は人数、枠内は理由で主なもののみ取り上げる。

①　本プログラムに取り組んでみてどうだったか。

大変よかった４　まあまあよかった２　あまりよくなかった２　よくなかった０

・職員全員一人ひとりが、「学校サポートプログラム」やピア・サポートを意識して学級活動や授業、行事に生徒を取り組ませるようになった。
・段階をふんで定期的に取り組んでいたので目標が設定しやすく、やるべき課題が明確だった。
・プログラムを取り入れたことによる成果なのかが判別しにくく、正直わからない。

② 本プログラムは、生徒たちの人間関係づくりに役立ったか。

とても役に立った２ まあまあ役に立った３ あまり役に立たなかった３ 全く役に立たなかった０

・ふだん話さない子との交流の機会が増えた。
・実践を通して、仲間との関わり方について考えたり気づいたりすることができたと感じる。
・これから継続していくことで役立ってくると思われる。

③ 生徒たちは、友達のいいところや頑張っているところを見つけることが多くなったか。

多くなった１ 少し多くなった５ あまり変わらなかった２ まったく変わらなかった０

・お互いに認め合っている雰囲気があると思う。
・ありがとうカードを書いて、たくさん良いところを伝え合うことができていた。
・教員が意識すれば生徒も意識できる。普段の生活の中で認め合う声かけはまだまだのように感じる。

④ 生徒たちの中で、思いやり行動は増えたか。

かなり増えた０ 少し増えた７ あまり変わらなかった１ まったく変わらなかった０

・自然と友だちのために準備したり心配したりする態度が見られたと思う。
・クラスの１／３程度の生徒は、ピア・サポート後によい行動が増えた。
・少しは良くなっていると感じるが、学校全体がさわやかであたたかい感じになるのには、継続した取組みが必要だと感じる。

⑤ 先生方自身に変化はあったか。

変わった２ 少し変わった４ あまり変わらなかった２ まったく変わらなかった０

・何気なくやっていた活動をピア・サポートの視点を意識して行うことができるようになった。
・授業の中で、お互いに教え合ったりするような場面を設けるようになった。
・安心して活動できる雰囲気作りについて考えた。

⑥ ピア・サポートを実践してみて良かった点

・生徒も教員もチームでやっていこうという気持ちが強くなったように思う。
・話し合い活動を繰り返し行うことで、笑顔で言い合える場面が増えた。
・自分に生徒を伸ばすためのスキルの引き出しが増えた。

⑦ ピア・サポートを実践してみて良くなかった点

・活動に対するフィードバック（アンケートやワークシートへのコメント）が負担だった。
・学級での時間が取られる。
・生徒に厳しく指導することに抵抗を感じているのか、指導が甘くなったように感じる。

⑧ ピア・サポートについて疑問に感じていることや難しく感じていること

・ピア・サポートの教育課程上の位置づけが分からない。
・子どもが変わるためには部活動も含め学校全体で取り組むことが必要だが、職員がチームになって取り組むのが難しく、さらに日常的に取り入れるのは難しい。継続するのも難しい。
・授業への取り入れ方や、それらの実践事例があれば紹介してほしい。

(5) 考察

プログラムを実践するにあたり、まずはピア・サポートトレーニングの授業から取り組み始める学校が多い中、研究協力校においては早い時期に現職教育の時間を設け、学年会ごとでピア・サポートを取り入れるアイディアを出し合うことを行った。これは、先生方へのアンケートの回答にもあるように、「子どもが変わるためには学校全体で取り組むことが必要」、「職員がチームになって取り組むことが必要」という中核教員の意識から実現したことである。その後、取り組んだ１つひとつのピア・サポート活動について実践と省察を繰り返していった。また、夏季休業中に菱田教授の研修会に多く

の先生方が参加したり、研究推進委員会や職員会議等で話し合いを重ねたり、ピア・サポートトレーニングや道徳の授業、学校保健委員会等に向けての打ち合わせを活動の主担当者と所員で行ったりしていった。これらのことを通して、ピア・サポートがどのようなものなのかが中核教員以外の先生方の中でも少しずつ明確になっていったことが、「何気なくやっていた活動をピア・サポートの視点を意識して行うことができるようになった」というアンケートへの回答からも伺える。また、プログラム実施によって生徒たちによい変化があったと感じている先生が多いことも、アンケート結果から分かる。そのような生徒の変化からプログラムの実効性を感じたことが、プログラムへ前向きに取り組もうという先生方の意欲につながったのではないかと考える。一方で、プログラムを実施することによるマイナス面についての指摘もいくつか見られたので、それらの点については来年度の実践に生かせるよう検討しなければならない。

研究協力校にいろいろな形で関わる中で見えてきた課題としては２つ挙げられる。１つめは、ピア・サポート活動に対する先生方の意識の統一である。アンケート結果を見ると、教員間や学年会間で温度差があることが伺えた。この温度差をなくすためには、現職教育の継続および学年会等の小さな集団での話し合いを行い、先生方の意識を統一していくことが重要であると考える。また、それぞれのピア・サポート活動の目標を先生方に明確に提示する機会を設けることも、全教職員が同じ目標に向かって同じ意識で協働することにつながるであろう。２つめは、実践における連携のあり方についてである。今年度、所員による現職教育を３回実施したが、学校から研修内容についての聞き取りがしっかりできていなかったこと、学校から依頼を受けた所員と現職教育を担当する所員間の連携が不十分であったこと等があり、学校のニーズに合った研修内容にならなかった回もあったように思う。どの時期にどのようなピア・サポート活動や現職教育等が必要かということを学校と十分に協議し計画的に研究を進めていくことが求められる。

来年度も引き続き研究協力校を依頼しているので、今年度中に来年度の方向性や取組みについての話し合いを先生方へのアンケート結果も踏まえながら実施し来年度の実践研究につなげていきたい。

### ３　地域全体で取り組む「持続可能な幸せを育む学校づくり」の実践研究

(1)　特別研究事業「持続可能な幸せを育む学校づくり」

教育総合研究所では、昨年度から特別研究員制度を実施している。今年度からこの制度を活用して「持続可能な幸せを育む学校づくり」の実践研究を行うこととした。日本におけるポジティブ教育の第一人者である菱田教授に特別研究員をお願いして、教育相談センターとＦ町の幼小中合同研究会との協働研究を菱田教授の協力を得ながら進めていくことになった。

(2)　今年度の実践研究について

①　研究協力地域（Ｆ町）について

Ｆ町は人口が少なく、こども園・小学校・中学校がそれぞれ１校ずつの町である。各学年１クラスずつ、１クラスの人数も７人から 20 人程度で幼少期から中学校卒業まで同一集団の中で学校生活を過ごしている。Ｆ町には幼小中の研究組織である幼小中合同研究会があり、小中の管理職と教務主任・研究主任、こども園の主幹保育教諭からなる研究推進委員会で推進計画を立案し、授業研究や幼小中の交流事業、教職員の研修等を幼小中合同で行っている。

合同研究会では、今年度の研究主題を「郷土に根ざし、未来を見つめ、たくましく生きる子どもの育成」と設定し、各校と園の研究主題を関連付けてスクールプランに明記したうえで、各校と園が研究推進計画に基づいて実践研究を行っている。

②　研究協力地域の課題

安定した人間関係という小規模校の利点がある反面、小規模校特有の人間関係の固定化などの困難さや、人間関係力の構築に課題がある。また、中学校卒業後、町外の高校に進学する生徒がほとんどであるので、新しい環境や集団への対応力を子どもたちに身に付けさせていくことも求められる。

研究推進委員会としては、幼小中の教職員が連携し、意識改革をして実践を積み重ねながら力量を向上させていく必要性を感じている。また、地域の方々とも連携しながら地域全体で、予測困難で変化の激しい新しい時代を生きるＦ町の子どもたちが、幸せな人生を自ら創り出すことができる力を身に付けていけるような教育活動を実践していくことを研究の方向性としている。

(3)　実践の概要

特別研究は、３年間実施することを計画しており、１年目は今ある教育活動の中でどのような実践を組み込んでいけるかを検討しながら教育課程編成を重点的に行い、２年目には教育課程に位置付けて実践し、福井県版ポジティブ教育プログラムを作成、３年目にはプログラムを県全域に提案していく予定である。実践の概要では、今年度の実践について記述する。

①　平成 29 年度第４回幼小中合同研究会推進委員会（３／22）

（参加者：小中校長・教頭・教務主任、こども園の主幹教諭２名と所員）

ア　平成 30 年度の研究の方向性について

第５回幼小中合同研究会（２／19）では、「F 町の子どもたちにどういう大人になってほしいか」について話し合い、グループでの話し合いで出た意見を「自分で考える」、「まわりの人へ思いやりや感謝の気持ちをもつ」、「コミュニケーション力がある」、「対応力がある」、「自分に自信をもてる」等のカテゴリーに分けた。(図 15) しかしながら、そのために具体的にどのような教育活動を実践していったらよいかまでの話し合いには至らず、課題が残った。その後、F 町の教職員・保護者・地域の方々対象の教育講演会において、菱田教授から「一人ひとりが幸福な人生を自ら創り出していくために」と題して学校も地域も幸せになる秘訣として「逆境を乗り越え成長する力」、「基本的自尊感情を高めるための方策」について提案があり、シンガポールの小学校で実践されているポジティブ教育をベースにした学校の紹介があった。(図 16) 講演会に参加した保護者からは、「菱田先生のお話や事例の一つひとつが大変勉強になりました。あわせて校長先生の最後のお言葉で、『無条件に素晴らしいというメッセージを子どもたちにたくさん伝えたい』とおっしゃっていたことに子をもつ母として希望を見る思いがしました。ぜひこども園から中学校まで実践していただけたら幸いです。」、地域の方からは、「一人ひとりが生きていく限り、いくつかの逆境に出合うことも数多くあると思われる。でも、その苦しくて悲しいとき、誰でもなく気の合った友達に悩みを話して協調し合い、感謝して後の人生を楽しく生きたいものです。」等の感想を得た。また、教職員の感想にも菱田教授から提案のあったレジリエンス教育やピア・サポートプログラムを実践したいという感想もあり、次年度の研究の方向性として、教育相談センターの学校サポートプログラムの実践研究協力校として菱田教授の指導助言を得ながら実践を進めていくことに決定した。

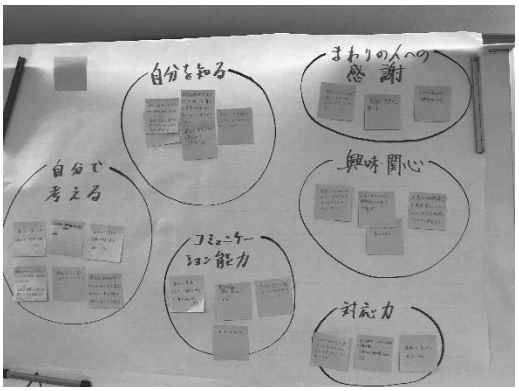



**図 15　「どういう大人に育ってほしいか」**

**図 16　菱田教授による教育講演会**

イ　教育相談センターより、「突破力育成！学校サポートプログラム」について

研究所からは、「学校サポートプログラム」についての説明、次年度のＦ町における実践についての提案をした。従来のプログラムに加えて菱田教授の協力を得ながらＦ町の先生方と協働で新プログラ

ムを作成していきたいことを提案したところ、推進委員会の先生方の同意を得ることができ、教科・道徳・特活等学校生活全体で取り組むこと、幼小中で連携した取組みにすること、地域とも連携して地域全体での取組みにすること、３年計画でプログラムを作成し、１年目の次年度は教育課程編成を重点的に行うことを確認した。また、次年度の計画として、幼・小・中の提案授業の日程や菱田教授の研修会の日程、教育講演会について等協議した。

②　平成 30 年度第１回幼小中合同研究会推進委員会（４／５）

（参加者：小中の校長・教頭・教務主任・研究主任、こども園の主幹教諭２名と菱田教授、所員）

ア　平成 30 年度推進委員会確認事項

新年度になり、異動により推進委員会のメンバーも多少入れ替わり、改めて今年度の研究について確認した。幼小中合同研究会の研究主題を確認し、その上で幼小中それぞれの研究主題を関連付けることを確認した。今年度は教育相談センターの「学校サポートプログラム」の研究協力校として、新プログラム作成のため協働で実践研究を進めていくことを確認した。

イ　協議事項

研究の推進計画や事業計画について協議した後、菱田教授より「Well-Being な学校づくり～たとえ困難な状況があっても、乗り越え、他者と幸せを創り出せる子どもたちを育てたい～」と題してポジティブ教育の「PERMA モデル」についての説明、F 町の先生方の目指す子どもの姿がそのモデルに一致すること、そのモデルに基づいた学校づくりが行われているシンガポールのウエストウッド小学校の育成指標である「THRIVE（繁栄・成長）」の表の説明、まずはこの指標を F 町の先生方でつくっていくことが必要であることの話があった。ポジティブ教育に基づいた教育実践例が日本にはまだないため、推進委員の先生方にとってもイメージしにくいものではあったが、新年度の早い時期に菱田教授による研修会を開催し、理解を進めていくことになった。

③　第１回幼小中合同研究会（兼ポジティブ教育研修会）（４／24）菱田教授

（参加者：幼小中全教職員、所員）

シンガポールのウエストウッド小学校の価値の表に基づき、幼小中の先生方がそれぞれの発達段階に合わせて「私は～します」という文言で子どもたちに付けたい力を考え、その表をもとにカリキュラムマネジメントをつくり上げていくという菱田教授による研修会を実施した。幼小中の先生方が同じグループになり、それぞれの段階の子どもたちの言葉で考え発表した。この表の文言についてはこれから３年間かけて実践と省察を繰り返していく中でブラッシュアップしていくことになるが、このような表をクロスで考えることで、先生方が幼児期から子どもたちに付けたい資質・能力を意識しながら一貫した教育活動を行っていくことが可能となると実感した。（図 17）

**図 17　クロスで話し合った価値の表の共有**

④　第２回幼小中合同研究会推進委員会（４／24）

（参加者：小中の校長・教頭・教務主任・研究主任、こども園の主幹教諭２名と菱田教授、所員）

研修会の後の推進委員会では、幼・小・中それぞれの研究主任から、今年度の研究の方向性についての提案があり、それぞれについて推進委員のメンバーの意見交換をした後、菱田教授の助言を得た。特に、６月に提案授業を行う中学校からは、自主研究主題を「いのちを大切にする心を育む学校教育の充実～道徳の授業を中心とした授業改善を通して～」とし、「いのち」を「能動的ないのち」と捉え、生徒たちに「よりよい人間関係をつくり、まわりと話し合う中でよりよい生き方を考え出していく」

ことをねらいとした道徳授業について提案したいとの報告があった。

⑤　中学校における「学校サポートプログラム」の実践（５／10・24）

中学校における提案授業では、「友情」の価値で道徳授業を公開することになった。その授業に向けて、「学校サポートプログラム」の授業を所員と授業者とのＴ・Ｔで実践した。全校生徒が縦割りのグループで座り、全教員が参観するという形で、「ジョハリの窓・みんなってすごい、自分もすごい」、「心地よい聴き方について考えよう」の２回の授業を行ったが、２回ともとても温かい雰囲気で生徒たちが活動し、先生方も自然な形で授業に一緒に参加するなど学校全体で取り組む授業の効果を実感した。

また、教職員の異動があったことで、先生方の研究の方向性についての理解にばらつきが生じたので、所員が昨年度末からの流れと学校サポートプログラムについての現職教育を行った。同じような研修会を小学校、こども園でも行い、先生方が同じ方向性で実践に取り組むことができるようにした。

⑥　第２回幼小中合同研究会（兼中学校指導主事訪問）（５／29）

（参加者：幼小中全教職員、菱田教授、所員）

中学校の提案授業として、２年生で内容項目２－（３）「友情」の道徳授業を行った。「仲間とライバル」という資料を使って「本当の友情とは」について生徒たちが活発に話し合いながら考えを深めていた。一般化では、生徒たちが「THRIVE」の「R」（仲間に関する指標）にあるような指標を考えて宣言する形で本当の友情について発表した。（図 18）４月から指標に基づいて道徳の授業や学校行事等に取り組んでいること、それまでの２回の学校サポートプログラムの授業が生徒たちの中に着実に積み上がっていることを感じさせる素晴らしい授業だった。

**図 18　中学校の道徳授業**

授業の後の研究会では、幼小中の先生方がクロスでグループに分かれて授業について検討し、全体で共有した。最後に菱田教授から「同じ目標に向かって一緒に頑張る仲間という観点で今後も指標を意識しながら実践を重ねていくことが大切」という助言を得た。（図 19）

**図 19　授業後の研究会**

Ｆ町では、このような形式での研究会は初めての取組みであり、異校種で同じ授業を参観して研究会を行うということの有効性を実感されたようだった。所員もグループ協議に参加し、様々な立場からの意見を聞くことで、道徳授業についてのみならず、幼小中一貫した取組みの重要性についても理解が深まった。

⑦　学校保健委員会＜小学校＞（７／18）

小学校の学校保健委員会では、レジリエンス教育の一つである「ネガティブ沼から抜け出す５つの方法」について学習した。

保健委員会から「どんな時に落ち込むか」と「落ち込んだ時にどのように対処しているか」について、児童と保護者にとったアンケート結果を発表し、その上で、研究所から落ち込んだりへこんだりする時の感情を「ネガティブ感情」といい、「ネガティブ感情」には、「自分にとって大切

**図 20　「気晴らしの魔法（ダンス）」**

なことを教えてくれる」というよい面と、「繰り返し頭の中を離れない」という悪い面があること、そのような状態（ネガティブ沼）から脱出する「気晴らしの魔法」として、「運動する、音楽を聴く、呼吸法（マインドフルネス）を身に付ける、書き出す、対話する」の５つの方法を伝えた。そして、そのうちマインドフルネスと運動を実際に体験した。運動は、全校でダンスを踊り、間奏のところの動きを縦割り班で考えるという活動を入れた。保護者の参加も多く、一緒に踊ってくださったり、先生方も班に入って児童と一緒に動きを考えてくださったりしてとても楽しい活動になった。活動後にPTA の役員の方からもマインドフルネスの効用についてのお話もあり、保護者の方々とも一緒に活動できたことで家庭との連携にもつながったように思われる。(図 20)

⑧　学校サポートプログラム自主研修会（８／３）菱田教授

菱田教授による「学校サポートプログラム研修会」を今年度は、F 町の幼小中合同研究会のピア・サポート研修会も兼ねて実施した。F 町からは、幼・小・中合わせて７名の先生方が参加し、ピア・サポートについて理解を深めた。免許更新や基本研修等も夏季休業中に集中するため、F 町の参加人数としては少なくなってしまったものの、２学期に研究授業を担当する先生方が参加し、授業に向けて見通しがもてたようである。F 町の先生方の感想としては、次のようなものがあった。

- 回を重ねることで、ピア・サポートについての理解をより深めることができます。２学期には、ぜひ実践に結びつけていきたいと思います。温かく支援してくださっている生徒たちに、ご教授いただいたピア・サポートが生徒の身になり力になるように実践に努めていきたいと思います。
- 「ピア・サポートの活動と子どもたち」領域の紹介で、いろいろな活動があることを知りました。少しずつ取り入れていけそうです。ピア・サポートは、取り組むには準備が必要という思いから、なかなか取り入れることができませんでした。しかし、自分の今やってきた活動に、ピア・サポートの視点を取り入れ、活動することはできると感じました。４月から受けもった学級はなかなか大変で、こんなクラスだからこそ、ピア・サポートは必要なのではないかと思っています。２学期から頑張っていきたいと思います。
- ピア・サポートは、日常の学校生活の中で使える場面がたくさんある。視点を変えるだけで、子どもたちの学び、心が変わり、成長につながると思った。F 小学校でも全職員と共有して、取り組んでいきたい。
- 職員、子どもたちの話を聴く時の姿勢で、ずいぶんと話す側の気持ちが違うということが演習で実感できた。話を聴く時には、うなずいてしっかり聞く環境を整え、どんなことでも話せる、伝えられる職場にしたいと思う。研修を受けていて気持ちがほっと温かくなりました。今からできることをスモールステップで取り組んで、幸せの花をたくさん咲かせられたらいいなと思います。

⑨　第３回幼小中合同研究会（兼ポジティブ教育研修会）（８／17）菱田教授

（参加者：幼小中全教職員、菱田教授、教育相談センター所員３名）

「レジリエンス教育」や「レジリエンスの３つのステージ」を理解して、２学期の実践につなげることを目的とした菱田教授による１日研修会を実施した。幼・小・中の先生方がそれぞれに入ったグループを編成し、「理解：ステージ１（底打ち）編として、「ポジティブ心理学とは」、「レジリエンス教育とは」、「レジリエンステクニック（ステージ１底打ち編）」という内容について、理論と演習を実際の授業場面を想定しながら学べるようにした。「底打ち」、「立ち直り」、「教訓化」というレジリエンスの３つのステージのうち、「底打ち」のステージでは、「ネガティブ感情の悪循環から脱出する」、「役に立たない思い込

**図 21　レジリエンス研修会**

みを投げ捨てる」というテクニックがあることを学び、前者の方法として川柳を作ったり、マインドフルネスを体験したりした。後者については、感情のメカニズムとして「SPARK モデル」を学び、感情や行動を誘発する「捉え方」を理解し、「捉え方」を変えることで行動や態度を変えられることを、演習を通して学んだ。実際に子どもの立場で演習に参加することで、２学期に向けての授業のイメージがもてた。（図 21）

最後にグループで振り返りを全体で共有した。振り返りとしては次のようなものがあった。

・子どもたちが幸せを感じられるように、いろんな仕掛けができることを学んだ。まずは自分が実践し、子どもたちが実践できるようにしていきたい。
・ネガティブな心の在り方も必要だとわかった。考え方や捉え方の視点を変えるリフレーミングの必要性を学ぶことができた。プラスにもっていくために今日学んだトレーニングを日頃から実践し、自分も力を磨いていきたい。
・ネガティブ感情の大切さをいろんな先生からの言葉かけで吸収できた。川柳や「心の先生」の演習など、小学生にもできると思うので、２学期からの授業に取り入れていきたい。

⑩　レジリエンス教育の実践（９／20～10／23）

２学期の研究授業は、小学校３年生でレジリエンス教育の授業を実践することになった。10／23 の研究授業に向けて、９月から授業を積み上げていった。

ア　秘密の友達（９／20）

学級づくりの取組みの一つとして、「秘密の友達」というピア・サポート活動に取り組むことにした。３・４年生の合同体育の授業の最初に所員から「秘密の友達」について説明をした後、クラス全員と担任の名前を書いたピンポン球をひいて、体育の「高跳び」の活動の中で自分の秘密の友達の頑張っているところやいいなあと思ったところを見つけておくようにした。

次の時間に教室に戻り、木の葉の形の用紙に秘密の友達の頑張っていたところやいいなあと思ったところを記入して発表した。最初は戸惑う様子も見られたが、その後、回を重ねるたびに児童が喜んで取り組むようになっていった。

イ　感情について学ぼう（９／26）

自分の感情に気づき、ポジティブな感情とネガティブな感情について理解することと、ポジティブ感情の重要性とネガティブ感情の特徴を理解することをねらいとした授業を行った。

よいことがあった時に感じる「楽しい」気持ちや「うれしい」気持ちを「ポジティブ感情」、反対にいやな目にあった時やいやなことを言われたときに感じる「怒る」気持ちや「悲しい」気持ちを「ネガティブ感情」ということをおさえたうえで、それぞれの気持ちの言葉をグループで話し合いながら集める活動をした。気持ちを表す言葉がたくさん出され、児童の感想には「うれしい気持ちやかなしい気持ちをいっぱい書けました。人の気持ちは大切だなと思いました。」というようなものがあった。（図 22）

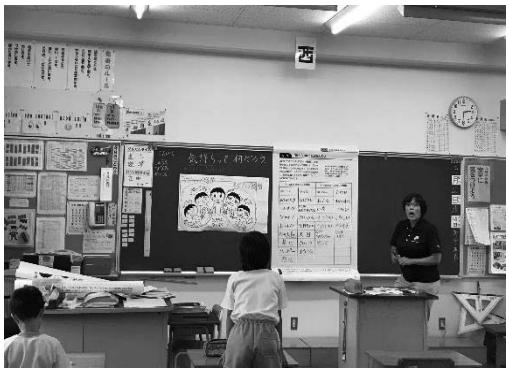


**図 22　「感情について学ぼう」**

ウ　上手なきき方をしよう（10／３）

ソーシャルスキルトレーニングとして、「聴き方」の授業 を行った。所員がＴ１、担任がＴ２で、「上手な聴き方」について説明した後モデリングを行い、児童が実際に「どっちをえらぶ」のテーマで「聴き方」のトレーニングを行った。テーマと役割が与えられることで話しやすくなり、自分の話を上手な聴き方で聴いてもらうことの心地よさを感じていた。

エ　自分の頭の中の声に気づこう（10／９）

自分の「捉え方（頭の中の声）」に気づき、物事の「捉え方」が感情を決めることを理解するという内容の学習をした。「明日漢字テストをします。」という先生の言葉でも、「やったー！百点取れるようにがんばるぞ！」と思う児童もいれば、「急に言われてもできないよ！嫌だなあ」と思う児童もいれば、「どうしよう、できるかなあ」と思う児童もいるということを確認し、その「頭の中の声」によって、「喜び」や「怒り」や「不安」といった違った感情がわき起こることを学習した。児童の感想には、「とらえ方、感じ方でポジティブかんじょうとネガティブかんじょうを左右するということがわかりました。」というものもあり、学習の積み重ねを実感することができた。（図 23）

**図 23　「自分の頭の中の声に気づこう」**

オ　自分の頭の中の声のクセを知ろう（10／15）

物事の「捉え方」には、それぞれの人がもちやすいクセがあることを知り、「プンプンオウム」、「あきらめオウム」、「はげましオウム」の３パターンの「捉え方」についていろいろな場面を想定して考え、自分の「捉え方」のクセを知るという内容の学習をした。児童の感想にも「自分の気持ちがぜんぶ書けてスッキリしました。自分はプンプンオウムが多いとわかりました。はげましオウムをもっとふやしたほうがいいと思いました。」など、自分の「捉え方」のクセを知ることで自己理解が深まったり、自分の課題を見つめ直したりでき、「捉え方を変える」という次時の授業の課題につながったことがうかがえるものが多かった。

カ　第４回幼小中合同研究会（小学校研究授業）「頭の中のオウムくんをチェンジしよう」（10／23）

（参加者：幼小中全教職員、菱田教授、教育相談センター所員３名）

幼小中合同研究会の研究授業として、「頭の中のオウムくんをチェンジしよう」の授業を行った。この授業は、自分の気持ちは自分の「捉え方（頭の中の声）」によって変わることを知り、ネガティブな捉え方をポジティブな捉え方に変えるという内容の授業である。ネガティブなオウムやポジティブなオウムを若手教員がロールプレイで演じ、それぞれのオウムに声をかけられた時の感情を話し合うことで、ポジティブなオウムのよさに気付かせた。（図 24）そのうえで、「逆上がりなどの鉄棒の技がなかなかできるようにならない」という場面を設定し、グループでポジティブなオウムの言葉を考えて発表した。「やればできる」、「鉄ぼうマスターになるぞ」、「あきらめないで、ちょうせんしよう」などの言葉を考えながら話し合っていたが、グループでの話し合いを始めると、教室内の空気感が変わり、しっとりとした雰囲気になった。さらに、ポジティブな言葉の発表を聴き、ネガティブな言葉と対比させることで、同じ場面でも自分の「捉え方」でポジティブに変えられることを実感することができていた。（図 25）

**図 24　オウムくんのロールプレイ**

**図 25　ポジティブなオウムの言葉の発表**

授業後の研究会では、初めてのレジリエンス教育の授業だったこともあり、授業の内容について熱心に議論された。８月の菱田教授の研修の内容を６時間の授業に落とし込んだことで、実際の授業ではどのように活動していくのかが具体的に共有できたこと、実際に授業を実践してみたことで見えてくる児童の反応や授業者の実感を理解できたことで、レジリエンス教育を実践していく上で方向性をつかむことができた。菱田教授からは、ネガティブな考え方をするにはそれなりに理由があるが、その考え方で行動するとどのような結果になるかまで考えさせること、その上で児童がどんな風に成長したいのかを問いかけ、「そのように成長するためには自分の考え方をチェンジできるといいよね」という動機づけを与えること、「自分は複数のオウムを飼っていて、自分で選 択できる」ということを伝えること、学級づくりという観点で、周りの友達がどんなオウムを飼っているのかが大事で、そのためにピア・サポートが有効であること等の助言があった。授業研究会の後、２回目のポジティブ教育研修会を実施した。

⑪　ポジティブ教育研修会（10／23）菱田教授

菱田教授によるレジリエンス教育の「理解：ステージ２（立ち直り）編」として、「やればできるという自信を科学的に習得する」、「自分の強みをいかす」、「心の支えとなるサポーターをつくる」、「感謝のポジティブ感情を高める」という内容の研修会を、８月の研修会と同じように幼・小・中の先生方で編成したグループで演習を取り入れながら実際の授業をイメージできるように実施した。それぞれの内容について、演習で児童・生徒の立場になって取り組むことで、内容が実践的に理解できた。特に、「強み」カードによる演習では、自分で考える自分の「強み」と他の人から見ての自分の「 強み」をカードを選んでなぜそう思うかを話し合うことで自己理解や他者理解が深まることを体験することができた。（図 26）また、「心の支えとなるサポーターをつくる」演習では、「私を支えてくれている人々」のサポーターマップを作ることを通して、自分が今もっている豊かな人間関係に気付くことができた。このような活動を意図的・計画的に実践していくことが、児童生徒の「逆境を乗り越える力」につながっていくことを実感した。

**図 26　「強み」カードによる演習**

⑫　小学校後期指導主事訪問　道徳共同参観授業（11／22）

小学校の後期指導主事訪問共同参観授業は、２年生において内容項目１－（４）「正直・誠実」の道徳で、初任者が授業実践を行った。授業までに授業研究会を重ねたが、１週間前には事前授業を行い、資料提示の工夫や板書の仕方、ロールプレイの効果的な方法等ほとんどの先生方が参加して長時間にわたって授業づくりについて話し合った。この授業では、「THRIVE」の小学校バージョンの「私は間違いや失敗から学びます」を意識し、発問や学習活動を工夫した。研究授業当日は、学校公開日を兼ねていたこともあり、たくさんの保護者も参観し、終始温かい雰囲気の中で授業が進んだ。児童が生き生きと授業に取り組み、授業のねらいが確実に達成されていた。所員も授業の構想の段階からかかわったが、学校全体で取り組む道徳授業の在り方や教師は学校で育つことをこの授業実践を通して学んだ。（図 27）

**図 27　２年生の道徳の授業**

⑬　第５回幼小中合同研究会（兼こども園研究授業・教育講演会）（12／18）菱田教授
（参加者：幼小中全教職員、菱田教授、教育相談センター所員３名）

ア　こども園研究授業

幼小中合同研究会のこども園の研究授業として、５歳児クラスで研究授業を行った。夏の菱田教授の研修会の「感情に気付く」という内容を意識しながら事前指導を積み重ねる中で、園児は「～して楽しい」ということは積極的に発言するものの、「～されてうれしい」という感覚をもつことは難しいという気付きがあった。そこで、園の活動の中で、「～された子はどんな気持ちだったかな？」と意識して投げかけたり、「『ありがとう』と言われるとどんな気持ちになるかな」と園児に考えさせたりし、「誰かにやさしくしてあげることを『親切』っていうんだよ」と「親切」についておさえた上で、その後「してもらってうれしかったこと」を発表し合う活動を継続した。研究授業では、「復活爆弾ゲーム」をみんなで楽しみ、振り返りの中でゲームの感想を発表する中で、楽しい・うれしい・悔しいなどの感情を話し合った。園児からは、「はじめのゲームでは負けてくやしかったけど、その後勝ってうれしかった。」などと気持ちの変化についての発言もあり、授業者がホワイトボードに気持ちを表す顔と矢印を描いて全員で共有した。最後に授業者から「楽しくゲームができるのは、相手チームがいるからで、みんながいるからこんなふうに楽しく活動できる。一人ひとりがみんな大切なお友達だね。」という話があり、園児たちも温かい雰囲気の中で話を聴いていた。（図 28）

**図 28　振り返りでの気持ちの話し合い**

授業後の研究会では、こども園の先生方から「気持ちをターゲットにした保育はこれまでも取り組んできて、言葉では当たり前のように『うれしかったね』などと話してきたものの、今回の取り組みで『こういうことをしたからうれしかったんだね』というように「言語化して伝える」ことが保育者の役割だということに気付かされた」という振り返りがあった。菱田教授からは、「こんなことがあったからこういう気持ちになった」という「気持ちに気付く力をつける」ことがレジリエンス教育では大切なので、保育者が日々の活動の中で意識して言葉を添えていくことが必要だとの助言があった。また、「うれしい・楽しい」だけでなく、「幸せにしていくために友だちがどうかかわるか」、「そのために大人がどのような環境をつくっていくか」を考えていくことの必要性と具体的な実践例についての助言もあった。

この実践については、「THRIVE」こども園バージョンの「私は、相手の気持ちに気付きます」、「元気いっぱい遊びます」の価値を意識して授業づくりを行った。

イ　教育講演会「『恩送り』の社会をつくる」（菱田教授）

昨年度に引き続き、教職員、保護者、地域の方々対象に菱田教授の教育講演会を実施した。（図 29）「『恩送り』の社会をつくる」という演題で、「親切の副作用」として、５つある中で特に「親切は、人間関係をよくする」、「親切は、伝染する」という内容だった。「親切は人間関係をよくする」の話では、「ねえねえ」という呼びかけに対して高い割合で応答すること、それもポジティブな言動で応答することが愛着を形成することにもなること、

**図 29　教育講演会「恩送りの社会をつくる」**

**図 30　「自分のワクワク」の交流**

「親切は感謝を生み、感謝は親切を生むこと」等の話があった。また、「親切は、伝染する」の話では、「脳内にある３つのシステム」として、「警報システム」、「報酬システム」、「絆システム」の説明があった。「警報システム」については、福井大学の友田明美教授の子どもの脳に影響を与える「マルトリートメント」の話から、親の不適切なかかわりが子どもたちの不安を増大してしまうこと、「報酬システム」と「絆システム」については、諏訪中央病院の鎌田實先生の「命を守る３つのつながり」の話から、「相手の身になって考えること」、「行動が変わらないと意味がないこと」、そしてその根底には「言葉、ホルモン、愛、おもい」が必要なことの話があった。その上で、「自分のワクワクを見つけよう！」という演習を実施し、自分のワクワクを書き出して他の人と交流した。わずかな時間だったものの、「自分のワクワク」を交流し合っている時間は会場の雰囲気がふわっと温かくなり、こういう時間をもつことの大切さを実感した。菱田教授からは、ワクワクについて共有することで、自分とつながり他者とつながることができること、親や教師がワクワクして生きることが子どもたちの幸せにつながるということの話があり、親と子、教師と子どもたちがこのような時間を家庭や地域、学校でもつことが、幸せな学校、地域づくりにつながるのだということを感じた。(図 30)

後に「『恩送り』の社会をつくる」として、医師の日野原重明先生の「人からもらったやさしい善意を困っている人におすそ分けする」という「ペイ・フォワード」の教えの紹介があり、一つの「親切」がプラスの連鎖を引き起こす「波及効果」、「ドミノ効果」を使って、「私たち大人がみんなでＦ町の子どもたちのワクワクを育てて、恩を返し、恩を送る人を育て、持続可能な幸せを育んでいきましょう。」と結ばれた。

感想としては、次のようなものがあった。

- 「恩送り」という言葉に惹かれ、講演会に参加させていただきました。とても興味のある内容でワークショップでは自分自身のワクワクを考えることでとても楽しくなり１時間半の講演があっという間でした。子どもたちのワクワクを育てみんなで「恩送り」していけるよう、愛に満ちた思いを大切にしていこうと思いました。
- 親切にしたり、されたりすることは人間関係をよくしたり幸せをもたらしたり、たくさんいいことがあるとわかりました。自分の経験を振り返るよい機会になってよかったです。自分も恩をいろんな人に送り、子どもたちが楽しく学校生活を送れるよう精進していきたいです。
- 恩送りが自分の幸せ、世界の幸せにつながることがよく分かりました。あとはそれをＦ町の子どもたち、地域に向かって、学校がどのように発信するかだと思います。
- 「恩送り」ってとても素敵な言葉だと感じた。誰かからもらった“恩”を誰かに送っていく。その様な気持ちを一人でも多く抱いていれば、自分たちの周囲はとても温かいふんわりとした環境になり、それが少しずつ大きな輪へとつながっていくといいなと思う。まずは、自分がワクワクした気持ちで、子どもたち、家族、地域の方々が幸せになれる恩を積み重ねていきたい。

２月の講演会に引き続き、教職員・保護者・地域の方々で一緒に講演を聴き、思いを共有できたことがとても意義あるものだった。

(4)　結果

幼小中の先生方にアンケート調査を行った。

①　今年度の取組みを振り返って、園児・児童・生徒にとってどのような成果があったか。

・園から小学校へ行く子どもたちが、今園で何が本当に大事なのかということをもう一度考えることができた時間となったこと。様々な人と関わりながら自身がハッピーになり、そしてそのハッピーを様々な人に送れる人間になりたいと感じられたこと。（こども園）
・特に若い先生方にとって、素晴らしい経験（研修）となったと思う。またそれが授業に活かされていると感じる。（小学校）
・ピア・サポートやポジティブ心理学への関心、研修の受講歴は様々な教師集団であったが、菱田教授、研究所による本格的な研修・模範授業参観の機会を得て、学校全体でいのちを大切にする心を育む教育の実践を進める基盤ができた。（中学校）

②　今年度の取組みを振り返って、先生方にとってどのような成果があったか。

・感情というのは自然とわいてくるものだと思っていたが、保育者が言葉にして子どもたちに伝えていくことで、子どもたちの感情の幅が広がり感情を少しでも伝えられた。（こども園）
・相手の良いところを積極的に見つけられるようになった。また、自分を大切にしようという気持ちがよりいっそう強まったように思う。（小学校）
・本校生徒は幼少期から変化の少ない小集団の中で育ち、関係が安定している一方で、学級内での立場が固定化しており、人間関係力の育成に課題があった。今年度の実践により、計画的に人間関係力の育成が図られた意義は大きいと感じている。（中学校）
・１町１校ということで、こども園の頃から子どもたちに関わっていく教員が同じテーマのもと話し合いができ、これからの幼小中連携に向けベースが培われた。（中学校）

③　レジリエンス教育についての研修や実践で、先生方の意識に変化はあったか。（26 人回答）

Ａ　あった　15　Ｂ　少しあった　8　Ｃ　あまりなかった　3　Ｄ　まったくなかった　0

Ａ・Ｂの理由
・子どもたちへの声かけ、援助など、子どもたちとの関わりをじっくり振り返ったり考えたりすることが多くなったから。（こども園）
・一回一回の講義や研修を通して、自分自身もっと前向きにならなければと思うことができた。考え方や物事の捉え方ひとつでいろいろな方向に幸せになったり前向きになったりできることが分かった。（小学校）
・生徒のレジリエンスを高めたいという思いは各教職員が従来からもっていたと思うが、基盤となる理論を含めて本格的に学んだのは今回が初めての方が多いので、生徒との向き合い方や指導面で効果は大きいと思われる。（中学校）

Ｃの理由
・実践例が少なく身近に感じられなかった。
・合同ですることのメリットがあまり感じられなかったから。

④　取組みを進めていく上で、困難を感じた点はどのような点か。

・こども園は、職員全員での研修が難しいため、一体感に欠ける。(AM７時～PM６時まで保育しているため)（こども園）
・レジリエンス教育を進めていくのに教員間で温度差があるように感じる。児童の内面の変化は捉えにくいので、実践になかなか踏み出せない。(小学校)
・学んで終わりではなく、それを生活していくうえでどう活かしていくか、またそれを子どもたちにどのように教えたり伝えたり、そして子どもたちがどう実践していくか。(中学校)
・教員同士の協働性を高める場面をどこでどのようにして作るのかをもっと話し合っておかないとできない。(中学校)
・研修会等は大変有意義であったが、学校行事等の精選を行わないと多忙化につながっている。（小学校・中学校）

⑤　来年度に向けての改善点

・学活や道徳では行っていたが、教科とどうつなげるのか分からなかった。(小学校)
・学年ごとの年間計画を作成して、全学年で取り組んでいくのがよいと思う。取り組んでみないと成果は分からないと思う。(小学校)
・大事にしていきたいものは基本的に同じでも、子どもへの伝え方は幼・小・中それぞれで異なってくる。幼小中合同の取組みがいつも有効とは言えない。(中学校)
・合同での取組みを増やすよりは、それぞれの学校でそれぞれの実情に合わせた取組みを行っていく方が実践的ではないかと感じた。(中学校)
・例えば、ピア・サポート、レジリエンス教育を、何年の道徳のこの価値項目で使えるというような話し合いを小低・小高・中学ぐらいに分かれてできるといいと思う。

(5)　考察

平成 28 年度から学校サポートプログラムの実践を積み上げていく中で、学校全体で取り組むことの困難さや小中連携や地域との連携の困難さ等の課題が浮き彫りになった。また、今の子どもたちが生きる変化の激しい予測困難な新しい時代に対応できる資質・能力を学校教育の中でいかに身に付けさせていくかという課題についても、県内の多くの学校が直面している。今年度、教育相談センターの３年間の特別研究１年目として、菱田教授の協力を得ながらＦ町の幼小中合同研究会と協働で実践を積み上げることができ、それらの課題を解決していくための足がかりは得られた。

今年度の成果と課題として以下の３点が挙げられる。

①　幼小中合同での取組みの成果と課題

幼小中合同研究推進委員会を計画的に開催し、事業計画や研修の内容、研究授業等について適宜話し合いながら実践を進めることができたので、年間の見通しをもって実践を積み上げていくことができた。また、推進委員会に菱田教授と所員が参加したことで、それぞれの研修や研究授業についてどのようなねらいをもって実践するのかが明確になったり、学校や園側が実践を進めていくうえでの不明な点や不安な点を相談することができたりして、安心して取り組むことができた。

課題としては、アンケートにもあるように「幼小中での合同の取組みが教員の多忙化につながっている」ということが挙げられる。各学校の実情が異なる中で協働していくために、推進委員会でさまざまな調整を行ってはきたものの、来年度に向けてさらなる工夫が求められる。

②　幼・小・中での研究授業の実践

Ｆ町の幼小中合同研究会では、これまでも幼・小・中それぞれが授業を公開し、相互に参観し合いながら研究をしてきたものの、どちらかというと異校種の授業について理解を深めることを目的とし

ていた。今年度は、年度初めに昨年度末の研究会で先生方から出された「どういう大人になってほしいか」から導き出された子どもたちに付けたい力（資質・能力）を「THRIVE」という価値の表に落とし込み、幼・小・中それぞれの段階で子どもが宣言する形で考えたことで、幼小中で共通認識をもって授業研究に取り組むことができた。この価値の表については、３年間で実践と省察を繰り返しながら、菱田教授の研修会において検討する時間を設け、完成させていく予定である。

課題としては、幼小中の実情や子どもの発達段階が違うため、授業研究を幼小中連携で行うことにどれだけの意義や価値があるかということを教員自身で納得ができるようなものにしていけるかということが挙げられる。そのためには、今年度の実践をもとに来年度に向けてより体系的な授業研究の体制を考えていく必要がある。昨年度末の推進委員会で、研究所から、F 町の教職員全員を「授業部会」、「特活総合部会」、「教育相談部会」、「環境部会」（いずれも仮称）の４部会に分け、それぞれの部会で話し合いながら実践を進めていくことを提案し、１年目はそのことも念頭におきながら実践を重ねてきたので、来年度の授業研究については幼小中の学習担当の教員で構成する「授業部会」を中心に授業研究を進めていくことが望ましいと考える。

③　意図的・計画的な研修の実施

今年度、教育相談センターの特別研究としてＦ町における実践研究を実施できることになったことで、先端教育センター教育推進事業として予算が付き、特別研究員として菱田教授の手厚い支援を受けることができた。菱田教授には、年度初めの推進委員会から研究授業参観、その後の授業研究会での助言、年度途中の推進委員会、レジリエンス研修会、地域の方や保護者、教職員対象の教育講演会の講師と年間を通じて密接に関わっていただき、その都度必要な指導・助言や講演をしていただくことができた。このことで、研究推進を意図的・計画的に進めることができ、教職員のポジティブ教育（レジリエンス教育）について理解が深まったり、幼小中の距離感が縮まり一体感が強まったりした。また、地域の方々や保護者にも、学校がどのような方向を向いて教育活動を行っているかを発信する機会にもなった。また、年度がかわって教職員の異動による教職員の理解に差が出てしまう場合や各学校や園の実情の違いによる研修のニーズの違いに対しては、研究所による研修会を実施して対応することができた。

課題としては、やはり時間の確保が挙げられる。過去の実践例がない中で「ポジティブ教育」という新しい考え方の教育を実践していくためには、まず教員が「ポジティブ教育」について理解を深める必要があり、いかに効率的にその理論を理解し、実践にまで落とし込めるかが１年目の課題であった。推進委員会で日程を調整しながら幼小中合同の研修会を実施したものの、元々それぞれの学校や園の教育活動があり、さらに道徳の教科化や小学校外国語等新しい教育活動への対応もある中で、プラスアルファの教育活動を実践していくことは、F 町の先生方にとって時間的にも労力的にも非常に大きな負担であったことと思われる。今年度の実践をもとに来年度に向けて、カリキュラム・マネジメントを進め、教科横断的な視点から教育活動と組織運営について検討し、先生方の負担を少しでも軽減して幼小中の教育目標や幼小中合同研究会の研究主題を具現化し、「持続可能な幸せを育む学校づくり」の実現に向けて協働して実践研究を重ねていく環境づくりをしていくことが求められる。

来年度はポジティブ教育の理念を教育課程の中に位置付けて、より考え方や価値観を浸透させることを目標としている。特に、新指導要領本格実施に向けて、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業づくりに重点を置きたいと考えている。また、今年度の実践では、地域との連携に課題が残ったので、「社会に開かれた教育課程」の実現のためにも地域との連携の方策について模索していきたい。そのために、今年度の成果と課題を踏まえ、推進委員会と協議を重ねながら推進計画を立案し、２年目の実践研究につなげていきたい。

## Ⅲ　研究の総括と今後の方向性

今年度は実践校の中から研究協力校または研究協力地域を依頼し、学校および地域の課題解決に向けて様々な実践を行った。実践事例集作成２年目の今年度は、昨年度の課題を踏まえ、研究協力校で、実践と省察を繰り返しながら授業実践や現職教育、菱田教授による研修会を計画的に組み込みながら実践研究を進めていった。研究協力校の先生方へのアンケート調査などから、児童生徒に望ましい変容があったり、先生方自身の意識の変容につながったりしたと感じた先生方が数多く見られ、今年度の実践は学校の課題に応じた支援として一定の成果を収めることができた。しかし、幼小中それぞれがすでに多くの教育活動を行っている中で、さらにソーシャルスキルトレーニングやピア・サポート活動、ポジティブ教育といった新たな取組みを行っていくことが､先生方にとって負担となったことは否定できない。また、それぞれの取組みで何を目的として実践し、その取組みを実践することでどのような効果があるのかを学校全体で共有して年間を通して計画的に実践を進めることができなかったことも課題として挙げられる。それらのことが、全ての教職員が同じ意識で実践に取り組む困難さにもつながった。

これらの課題をうけて、今後の方向性として次の３つの改善策を挙げる。１つめは、カリキュラム・マネジメントを進め、これまで行っていた活動と新たに取り組んでいく活動について検討する必要がある。既存の取組みに加えて新たな取組みを行うのではなく、教科横断的な視点で、学校教育目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくことによって教員の負担感の軽減を図ることができると考える。２つめは効果的な現職教育を計画的に行うことである。忙しい中でも先生方に前向きに実践を行ってもらうためには、その実践がなぜ必要なのか、その実践を行うことでどのような効果があるのかなどといったことを、こちらから先生方に発信していく必要がある。どの時期にどのような研修を実施していくとよいかということを学校のコーディネーターと所員で十分に話し合った上で計画的に研修を提供していくことが必要であると考える。３つめは、所員のさらなる力量向上である。学校における様々な実践に関わる場合、学級経営やソーシャルスキル、ピア・サポート活動、ポジティブ教育に関する理解のみならず、カリキュラム・マネジメントや道徳など幅広い分野についての理解と実践力も必要となってくる。所員は学校の様々なニーズに応えられるだけの力量をつけていくことが求められる。

今年度、県教育委員会から出された福井県不登校対策指針では、不登校の未然防止に向けた取組みの１つとして、「道徳教育・特別活動の充実」の中にソーシャルスキル、レジリエンス、ピア・サポート活動が位置づけられた。今年度の実践研究は来年度、再来年度と継続して実践する予定である。学校の課題解決のために効果的に活用できるプログラムにするために、今年度の実践を踏まえて来年度の実践につなげていきたい。また、「学校サポートプログラム」の有効性を、これまで積み上げてきた具体的な実践事例を示すことによって、さらに県内の多くの学校での実践につなげていきたい。

最後に、本実践事例作成のためにご協力ただいたこども園・小学校・中学校の先生方、ご指導いただいた菱田教授にこの場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

《参考文献》

○足立啓美・鈴木水季・久世浩司著（イローナ・ボロウェル監修）(2014)『逆境に負けない心を育てる本』　法研
○近藤卓（2013）『子どもの自尊感情をどう育てるか　そばセットで自尊感情を測る』　ほんの森出版
○森川澄男(2008)　菱田準子著『ピア・サポート指導案＆シート集』ほんの森出版